

# しまねの道徳

道徳教育郷土資料

小学校高学年

島根県教育委員会



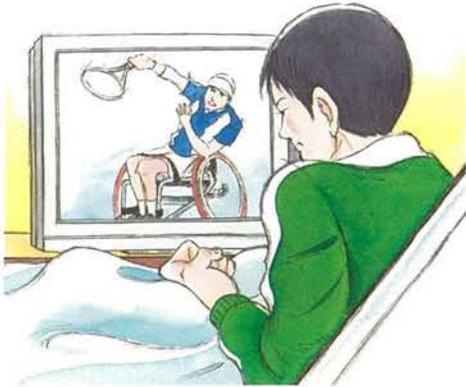
# しまねの道徳 もくじ

道徳の時間は……	1
心をきたえ、自分らしくかがやこう……	2
<b>1</b> 世界の人びとを守る……	3
国際救えん活動で活やくする看護師 松近真紀さん	
<b>2</b> 采の願いを……	9
ホーランエンヤにかける思い	
<b>3</b> ロンドンパラリンピックへのきつぷ……	15
車いすテニス日本代表 三木拓也さん	
<b>4</b> 将棋の道を歩く……	21
女流棋士 里見香奈さんの挑戦	
<b>5</b> 高瀬川にごめられた思い……	27
大梶七兵衛と荒木浜	
<b>6</b> 大森から世界へ……	33
中村ブレイス社長 中村俊郎さん	
<b>7</b> ひとすじのなみだ……	39
イルティツシユ号漂着と和木の人びと	
<b>8</b> 夢、大空に向かって……	45
東京スカイツリー®をデザイン監修した澄川喜一さん	
<b>9</b> 城山桜と生きる……	51
生きかえった金谷のシンボル	
<b>10</b> トンネルにたくした運命……	57
沖田を救った長嶺嘉左衛門	
<b>11</b> いわがき養しよくへの挑戦……	63
日本で初めて成功させた中上光さん	
<b>12</b> 馬入れをなくすな……	69
玉若酢命神社の御霊会風流	
<b>13</b> 幸せコアラ……	75
<b>14</b> 知らない間の出来事……	81

# 道徳の時間は……

■ お話を読んで、いろいろなことを感じよう。

自分らしさを見つけよう



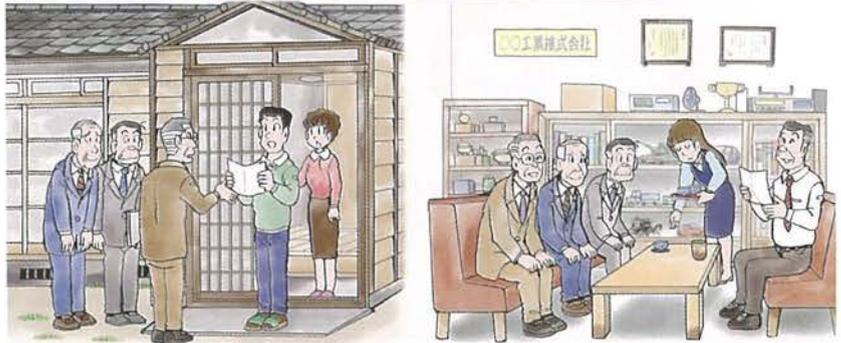
かけがえのない命を大切にしよう



人に思いやりをもとう



たくさんの人とかかわり合ってすごそう



■ みんなで話し合っ、いろいろな考え方を知ろう。



自分自身をよく知り、  
みんなに伝えよう。

〇〇さんの考えは  
参考になるな。

〇〇さんはこんな  
考えをもっていたんだ。

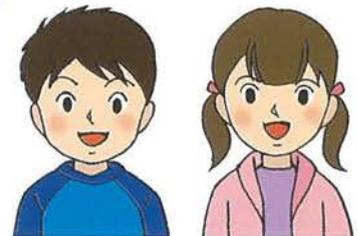


友だちの考えに耳をかたむけよう。



それぞれの考えについて、  
話し合おう。

そうは言っても  
難しいときも  
あるな。



■ 自分をみつめ、よりよい生き方を考えよう。

- なやんでいること、<sup>こま</sup>困っていることの答えをさがそう。
- これからのことについて、真けんに考えよう。

なやんでいる  
のは、自分だ  
けではない。



『私たちの道徳』も参考にしよう。

# 心をきたえ、自分らしくかがやこう

## 自分を生かす

### 目標を目指す

- 3 ロンドンパラリンピックへのきっぷ
- 4 将棋しょうぎの道を歩く
- 6 大森おおもりから世界へ
- 8 夢ゆめ、大空に向かって



## ともに生きる

### 友は心の支えささ

- 13 幸せコアラ
- 14 知らない間の出来事

## 生命を愛おしむいと

### 生命をかがやかせて

- 1 世界の人びとを守る
- 7 ひとすじのなみだ

### 心をゆさぶられて

- 9 城山桜じょうざんざくらと生きる



## 社会に役立つ



### 役割と責任を果たす

- 2 采さいの願いを

### 進んで人の役に立つ

- 10 トンネルにたくした運命
- 11 いわがき養ちようせんしよくへの挑戦

### 郷土きやうどを愛する

- 5 高瀬川たかせにこめられた思い
- 12 馬入れをなくすな



パキスタンで救えん活動をする松近真紀さん（右）

### 松近真紀さんについて

- 昭和51（1976）年 松江市に生まれる。
- 平成9（1997）年 松江赤十字病院に勤務
- 平成17（2005）年 日本赤十字社和歌山医りょうセンターに勤務  
パキスタンで北部地しん被災者救えん
- 平成20（2008）年 ジンバブエでコレラ患者救えん
- 平成21（2009）年 パキスタンで紛争ぎせい者救えん
- 平成22（2010）年 ハイチで地しん被災者救えん
- 平成23（2011）年 イラクで紛争ぎせい者救えん
- 平成24（2012）年 日赤和歌山医りょうセンターを退職  
島根大学大学院医学系研究科に入学

# 1

## 世界の人びとを守る

国際救えん活動で活やくする看護師

松近真紀さん

松江市





九歳さいのころ、  
姉妹と一緒いっしょに（右）

平成十七（二〇〇五）年十月八日、パキスタン北部で大きな地しんが起きました。七万人以上の人がなくなり、三百五十万人もの人が家を失いました。地しん発生から四日後の十月十二日、日本から救えん活動を行うスタッフがはけんされました。その中に、看護師の松近真紀まつきさんの姿すがたがありました。

松近さんは、昭和五十一（一九七六）年、島根県松江市まつえで生まれました。三人姉妹の真中で、活発な子どもでした。

小学五年生のとき、家の近くでイギリス人の旅行者に道を聞かれました。うまく話をすることはできませんでしたが、これがきっかけとなり、松近さんとイギリス人旅行者との文通が始まります。文通を通してたくさんの英語を覚え、手紙を書くのが楽しくてたまらなくなりました。そして、中学生になって英語を勉強し始めると、得意な英語を生かして海外で働きたいという夢をもつようになりました。

そんなある日、松近さんは、ふと見ていたテレビの映像えいぞうにくぎづけになりました。そこにあったのは、海外で救えん活動をする看護師の姿でした。世界を飛び回り、笑顔えがおでてきばきと医りよう活動を行う看護師に、あこがれを感じました。

（わたしも、あんなふうになりたい。）

松近さんは、看護師をめざして勉強を始めたのです。





松江赤十字病院にて

看護学校に入った松近さんは、ある日、国際救えん活動こくくさいをしている先ぱいの看護師から話を聞きま  
した。

「看護師は、国せきとか、はだの色とか、性別せいべつとか、その人の地位とか、そんなものは関係なく、た  
だ目の前のとうとい命を守りたいという一心で、どんなにつらい状況じょうの中でもがんばることが  
できるのです。」

英語で話したい、外国で働きたい、というあこがれだけで国際救えん活動をする看護師をめざして  
いた松近さんでしたが、その言葉を聞いてはっとしました。

そしてそれは、松近さんの心の中に、これまでとはちがう目標ができた瞬間しゅんかんでした。

平成九（一九九七）年四月、松近さんは、松江赤十字病院の看護師になりました。

国際救えん活動ができる看護師になるためには、国内で看護師として五年間つとめなく  
てはなりません。松近さんは、かん者さんのために、一生けんめい働きました。国際救え  
ん活動に役に立つ研修会けんしゅうにも積極的に参加しました。いそがしく仕事をしながら、研修を  
受けるのは、時間的にも体力的にも大変でしたが、やめたいとは思ったことはありません  
でした。

平成十七（二〇〇五）年四月、松近さんによくチャンスが訪おとずれました。国際救えん  
活動を行う病院である、日本赤十字社和歌山医わかやまりようセンターに転勤てんきんになったのです。そ



してすぐに、

「次の国際救えん活動には、ぜひわたしをはけんしてください。」  
と願い出ました。

半年後の十月八日。パキスタン北部地しんが起こり、松近さん（まつちか）はついに国際救えん隊の一員となつたのです。

（今まで学んだことを生かして、しっかりと救えん活動をしてこよう。）

松近さんの強い思いを乗せて、飛行機は日本を飛び立ちました。

被災地（ひさい）のようすは、想像（そうぞう）を絶（ぜつ）するものでした。建物はすべてこわれ、道らしい道もなく、食べ物も水もない中で、町は混乱（こんらん）していました。粉（こな）ごなにくだけた建物のがれきは山になり、そこには、食べ物を求めて争（あ）う人びとや、家族をさがしてさまよう子ども（こども）の姿（すがた）がありました。地しんの被害（ひがい）が大きな地域（ちいき）には、近づくこともできませんでした。

（こんなにひどい状態（じょうたい）とは。わたしにできることはあるのだろうか。）

医（い）りよう活動（かつどう）が開始（かいし）できたのは、地しん発生（はっせい）から二週間（ふたしゅうかん）後のことでした。いす小さな手術（しゆじゆつ）用のテーブル（ていぶる）を置（お）いただけのしんりよう所（しよ）が開（あ）かれると、けがをした人（ひと）たちが、助け（たすけ）を求めて一（いっ）気（き）におし寄せ（よ）せました。とても一日（いちにち）でみられる人数（にんずう）ではありません。その上（うえ）、地しん（じしん）の発生（はっせい）から二週間（ふたしゅうかん）も過（す）ぎているため、けがのきず（きず）がくさり、深刻（しんこく）な状（じょう）

態になっている人が多くいました。治りようには、多くの時間と体力が必要です。松近さんたちは必死で治りようを続けました。

松近さんが救えん活動を行った村は、標高千八百メートルの所にあり、十月になると夜は氷点下まで冷えます。あまりの寒さにこごえてねむれない日が続きました。食事をする時間もほとんどなく、つかれは極限きょげんに達していました。

このようなきびしいかん境きやうの中でしたが、松近さんは、一人一人のけがのようすをていねいに聞き、笑顔えがおで話しかけ、治りように全力をつくしました。一か月の活動予定が三か月にのびても、弱音をはくことはありませんでした。

パキスタンでの救えん活動を終えて帰国した松近さんに、新聞記者がたずねました。

「その小さな体で、なぜあんなにかくくな救えん活動を続けることができるのですか。」

松近さんは目をかがやかせて答えました。

「そこに守るべき人びとがいるからです。」

にっこり笑ったその顔には、じゅう実感があふれていました。

その後、松近さんは島根大学医学部大学院に進学しました。勉強したことを、これからの国際救えん活動にさらに役立てていこうとがんばっています。



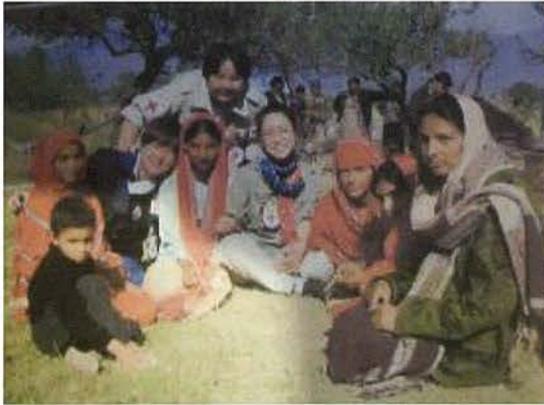
パキスタン北部地しん

平成17 (2005) 年10月8日にパキスタンで地しんが起った。死者73,338人、重傷者69,412人。



パキスタン北部地しん被災地

地しんでこわれた、たくさんの家が見える。  
(提供 朝日新聞社)



パキスタンでの活動

パキスタンの人びとと松近さん (中央)。



しん察を待つ長い列

ほとんどの人が4~5時間かけて山を歩いて来る。



ハイチでの活動

保健衛生教育をする。



ジンバブエでの活動

看護師を指導する。

# 2

## 采さいの願ねがいを

### ホーランエンヤにかける思い

### ホーランエンヤについて

- 慶安元 (1648) 年 松平直政公、豊作の大きとうを行う。以後10年ごとに船を使った神事を行う。
- 文化5 (1808) 年 馬潟の漁師が御神船を嵐から救ったことから、御神船を權伝馬船が引く「曳き船」が始まる。
- 嘉永元 (1848) 年 5地区が参加するようになり、權伝馬おどりが始まる。
- 安政6 (1859) 年 今のホーランエンヤの形になる。以後12年ごとに行う。
- 平成21 (2009) 年 以後10年ごとに行われることになる。

### ホーランエンヤ日程にっけい

- ◎渡御祭とぎよさい  
城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社までお運びする。大橋川で權伝馬おどりが奉納され、阿太加夜神社では七日間の大きとうが行われる。
- ◎中日祭ちゅうじつさい  
大きとうの中日に、阿太加夜神社の参道と境内で權伝馬おどりが奉納される。
- ◎還御祭かえりごさい  
阿太加夜神社に安置されていた御神霊をもとの城山稲荷神社にお返しする。大橋川と城山稲荷神社境内で權伝馬おどりが奉納される。



「えっ、ぼくが采振り——。たいこたたきじゃないの。」

地区の代表をしている祖父の言葉に、翼は目を丸くして聞き返しました。

「ああ。小学生はたいこたたきだが、この地区では采振りの中学生が足らんけん、今度はおまえに采振りをやってもらうぞ。来週からけいこだで。」

ホーランエンヤは三百六十年以上の歴史をもつ、松江市の伝統的な舟祭りです。約十年に一度、はなやかにかざられた櫂伝馬船の上で、うたやおどりがひろうされます。船の先の方でおどる男役を櫂、後ろでおどる女役を采振りと呼び、両方とも男の子の役目です。

「ぼく、がんばるけん。ねっ、おじいちゃん、お父さん。任せてよ、采振り。」

毎年五月の本番に向けて、前の年の十一月から練習は始まります。

ある日、翼は夕食もそこそこに、ホーランエンヤのけいこがある公会堂へと急ぎました。

采振りは女役のおどりです。上半身をしなやかに反り返し、天空に向かって采をふりながらおどる姿は、美しくなめらかでなくてはなりません。

「翼、だめ。だめだわや。」

「おじいちゃん、だめ、だめって、何がだめかね。教わったとおりにおどってるよ。ちゃんと教えてや。わからへんがあ。」

翼にはどこがだめなのか、全くわかりませんでした。

(才能がないんだ。孫のぼくが下手くそだけん、おじいちゃんはおこっちよるんだ。)

そしてそのまま、一か月が過ぎました。

練習が始まって一か月たったある日、翼の部屋へやに、祖母そぼが来ました。

「翼。采振り、どげかや。」

「うん。おじいちゃんにおこられっぱなし。言われることが、ようわからん。」

「じいさんは、ホーランエンヤのことになるよ、のぼせもんだけんなあ。」

祖母は話を続けました。

「翼、おまえはなんで、ホーランエンヤに出るかや。」

「それは、昔から伝わるもんだけん、だれかが伝えていかないと、とぎれてしまおうし。」

「そのとおりだと、ばあちゃんも思うで。じゃあ、おまえは何を伝えるかね。」

「だから、おどりの型とか、けししょうとか、衣しょうとか、道具とか……。」

「それだけかね。」

「えっ。」

「ばあちゃんは、それだけじゃないやな、気がするわ。」

四月、祭りのけいこは大づめをむかえていました。今日は船ふねを實際じっさいに川に出す、合同ごうどうげいこが行われます。





「權かきと、うたとおどりが、一つにならんといけん。」

祖父は、険しい顔をしながら、いつにも増して大声でさげんでいます。しかし、区域の川岸をひと回りしたところで、船はとつ然止められました。

「だめだ。采振りが合わん。自分をおし出し過ぎだ。」

気持ちをこめて一生けんめいにおどればなんとななる、と思っていた翼の心は、祖父のひと言でしほみました。

「翼、おまえはホーランエンヤで何を受けついで、何を伝えようとしとるかや。」

「えっ、それは。」

翼は言葉につまりました。

「わしはのう、教えられたことをそのまままねることが、伝統を受けつぐことだとは思わん。そもそも、まねしきれもんじゃない。おまえが感じたことを大事にしてほしいわや。」

(感じたことを大事に。)

「みんなそうしてきたけんなあ。わしもおまえの父さんも。だけん、おまえにもきつとできるわや。」

これまでおどりの身ぶり手ぶりのことしか頭になかった翼は、まわりの人たちの様子をじっくりと見つめました。

三十人ほどの人が力を合わせて船をこいでいます。

「伝統を守っているのは、權かきの人たちも同じだけんなあ。」  
という祖父の言葉を思い出しました。みんなが祭りのためにけん命でした。

五月、ついに祭りのクライマックスである、還御祭かんぎよさいの日になりました。約十年に一度のこの祭りを  
見ようという観客で、川岸はうめつくされていました。翼はいっしゅんとまどいました。しかし、お  
どり始めると、会場の熱気に自分がおしおされていくのに気がつきませんでした。

ホーランエーヤ

ホーランエーヤ

思いきり体を反り返らせました。空をおおぐと、その先に後ろの岸が見えました。天と地がひっく  
り返ります。それでも、たおれる気がしません。たくさんの人にささ支え  
られているのを感じました。

うたとおどりと權かきがぴたりと合ったそのしゅんかん、

(これが。この感じか。)

翼は、体のしんがぞくつとふるえるのを感じ、心が一気に晴れ上が  
りました。

(丹羽隆「采の願いを」による)





けんがい  
剣權

船の先頭で勇ましくまう。(やだ地区)



さいぶ  
采振り

大きく体を反らしてまう。(ふくとみ地区)



かいでんま  
權伝馬船

うたもおどりも權かきも一つに。(おおい地区)



權かきの人たち

息を合わせて權をかく。(まかた地区)



たいこたたき

小学生が担当する。(馬潟地区)



權伝馬船

大観衆に見守られながら進む。(おおみさき地区)

# 3 ロンドンパラリンピックへのきっぴん

車いすテニス日本代表 **三木拓也さん**



ロンドンパラリンピックに出場した三木拓也さん  
(公益財団法人日本テニス協会HPより)

## 三木拓也さんについて

- 平成元（1989）年 出雲市に生まれる。
- 平成11（1999）年 出雲市立神戸川小学校4年生からテニスを始める。
- 平成14（2002）年 出雲市立河南中学校ソフトテニス部に所属する。
- 平成17（2005）年 鳥根県立出雲高校硬式テニス部に所属し、県高校総体で準優勝する（ダブルス）。
- 平成21（2009）年 神戸市の大学に進学し、車いすテニスを始める。
- 平成22（2010）年 千葉県のテニストレーニングセンター（TTC）に拠点を移す。
- 平成24（2012）年 ロンドンパラリンピックに出場する。

出雲市



(テニスのコーチになりたい。)

高校生の三木拓也さんはテニス部に所属し、将来は大好きなテニスにずっとかかわっていききたいと思っていました。

初めてテニスのラケットを持ったのは、出雲市立神戸川小学校四年生のときでした。スポーツが大好きな三木さんは、すぐにテニスに夢中になりました。

高校三年生になり、いつものようにテニスの練習をしていると、つ然左足をいたみがおそいました。これまでも練習中にけがをしたことがあった三木さんは、たいしたことはないと思っていました。

ところが、検査を受けた島根大学医学部附属病院で、医師にこう告げられました。

「骨肉腫という骨のがんです。若いので進行が速いため、すぐに入院して治りようする必要があります。ただし、治りようが成功したとしても、自分の足で歩くことはできなくなるでしょう。」

三木さんは、言葉を失いました。

家に帰って部屋にこもり、医師から告げられた言葉を、頭の中で何度もくり返しました。しかし、どう考えても受け入れることができません。



「なんでおれなんだよ。」

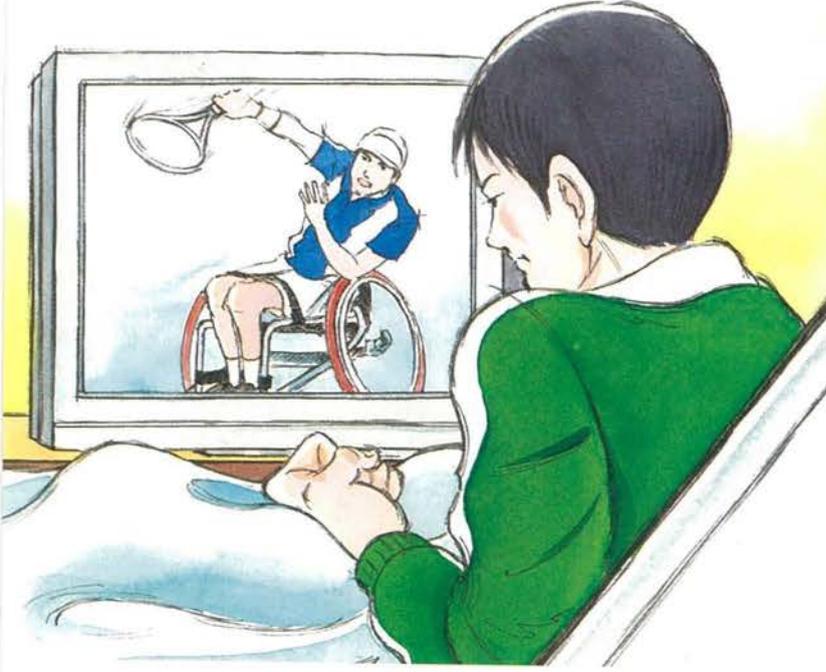
三木さんは、自分のあせがしみこんだ大切なラケットをたたき折り、泣きくずれたのでした。

次の日から、抗がん剤こうがんざいによる治りごうようが始まりました。ひどいはき気におそわれて食事をとることができなくなり、体は、みるみるうちにやせ細りました。

半年後、苦しい治りごうようはようやく終わりましたが、三木さんの心はとぎされていました。

(大好きなテニスがもうできない……。)

いつまでも光が見えない、暗やみの中にいるような気がしました。

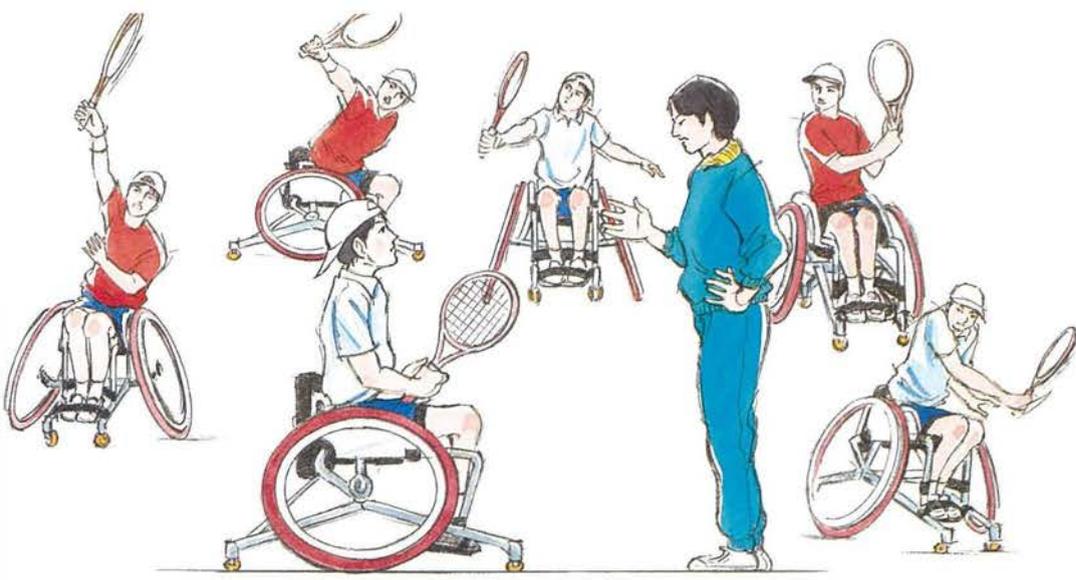


そんなある日、テレビで見た北京ペキンパラリンピックで、車いすテニスの国枝慎吾選手くにえだしんごが戦っていました。力強くすばやい動き、息をのむ見事なプレーの連続。国枝選手の金メダルが決まった瞬間しゅんかんは、初めて感じる感動で鳥はだが立ちました。

(おれにもチャンスがある。もう一度、テニスをするぞ。)

三木さんは、自分の中に勇気と希望がわいてくるのを感じたのでした。

つらいリハビリを乗りこえ、無事に退院たいいんした三木さんは大学生になり、再びテニスを始めました。今度は車いすテニスです。めざすは二年後のロンドンパラリンピックです。



パラリンピックに出場する選手の選考会が真近にせまったある日、世界ランクが上位の選手と練習する機会にめぐまれました。でも、自分の思うプレーが全くできませんでした。

(だめだ。こんなことじゃ、パラリンピックに出られない。)

練習後、三木<sup>みき</sup>さんは暗くしずんだ気持ちでいました。何もかもどうでもいいという思いが心に広がりました。そのため、コーチに「ご苦労さん。」と声をかけられても、返事をすることさえできませんでした。

すると、とつ然地ひびきのようなとなり声が、コートをふるわせました。

「思うようなプレーができないからってなんだ、その態度は。」

その瞬間<sup>しゅんかん</sup>、コーチにいつも言われている言葉を思い出しました。

『周りから<sup>おち</sup>応えんされる選手にならなければ、世界の頂点<sup>ちやうてん</sup>にたどり着くことなどできない。この人を<sup>じやうけん</sup>応えんしたいと思ってももらえることが、トップ選手の条件だ。』

いつもそう指導<sup>しどう</sup>されていたのに、全くわかっていなかった自分がはるかしくてたまりませんでした。

(自分はいったい何をしてきたのだろう。)

この日から、三木さんは、人が変わったように練習に取り組みました。

ついに、パラリンピック出場をかけた最後の大会がイスラエルで始まりまし  
た。この大会への参加は、遠いイスラエルで行われることを心配した両親から

反対されていました。しかし三木さんは、あきらめませんでした。

「がんに打ち勝ってここまで来たんだ。ここであきらめたら、またどこかで言いわけをしてにげてしまう。代表になりたいと、自分で決めたことを、最後までつらぬきたい。」  
そう説得して、戦いに臨み、結果は見事優勝。パラリンピックス日本代表のきっぷを手に入れたのでした。

ロンドンパラリンピックスで男子ダブルスに出場し、ベスト8に進出した三木さんはこう話しています。

「つらくても苦しくても、めざし続けることで多くの人が応援してくれれます。そのおかげで、自分の可能性と夢が広がっていくのです。島根の子どもたちにも、自分の可能性を広げて行ってほしい。」

今日も三木さんは、世界という大ぶたいを目標に、練習にはげんでいます。

ロンドンパラリンピックでの三木拓也さん（右）



とう病中の三木拓也さん（左）  
出雲高校の友達と。



丸山弘道コーチ（左）と  
周りから応援される選手に、と教えられた。

### パラリンピックについて

4年に一度、オリンピックの後にオリンピック開催都市で行われている「もう一つの（Parallel）+オリンピック（Olympic）」。夏季競技大会と冬季競技大会が開かれている。2012年のロンドン大会には、今までで最高の164の国と地域から、約6,740名が参加した。この大会で日本選手は、金メダル5個をふくむ16個のメダルをかく得した。



ロンドンパラリンピック開会式  
三木さんがさつえいした写真。(2012年8月29日)



ロンドンパラリンピック、車いすテニスシングル  
1回戦でサーブする三木さん。



ロンドンパラリンピック、車いすテニスダブルス  
準々決勝で負けた直後の三木さん（右）と真田卓さん。



# 4

## 将棋しやうぎの道みちを歩あるく 女流にゅうりゅう棋士きし 里見香奈さとみかなさんの挑ちやうせん戦

いずも 出雲市



### 里見香奈さんについて

- |               |                                    |               |  |
|---------------|------------------------------------|---------------|--|
| 平成4 (1992) 年  | 出雲市 <small>いずも</small> に生まれる。      | 平成22 (2010) 年 | 女流 <small>にゅうりゅう</small> 王将 <small>おうしやう</small> かく得 |
| 平成9 (1997) 年  | 将棋と出会う。                            | 平成23 (2011) 年 | 女流王将防衛   |
| 平成11 (1999) 年 | 「将棋の日」に参加する。                       | 平成24 (2012) 年 | 女流王位かく得  |
| 平成16 (2004) 年 | 女流プロ棋士となる。                         | 平成25 (2013) 年 | 女王、女流王座 <small>おうざ</small> かく得<br>女流王位、女流王将、倉敷藤花を失う。 |
| 平成20 (2008) 年 | 倉敷藤花 <small>くらしかとうか</small> かく得    |               |  |
| 平成21 (2009) 年 | 倉敷藤花防衛、女流名人 <small>ほんい</small> かく得 |               | *平成25年12月現在、女王、女流王座、女流名人の三冠 <small>さんかん</small>      |

「十六歳里見 最年少藤花」

大きな見出しが、全国の新聞をかざりました。「藤花」は、将棋の女流棋士の最高の地位を決める大会の一つです。正式名を「大山名人杯倉敷藤花戦」といい、女流棋士の実力がためされる大きな大会です。

平成二十(二〇〇八)年十一月二十三日、その大山名人杯倉敷藤花戦で、出雲市生まれの里見香奈さんが、見事に優勝しました。

「これまで努力してきたかがあります。まだ初優勝の実感はありませんが、家族や周りの人に、心からお礼を言いたいです。」

喜びを語る里見さんは、当時、まだ高校二年生でした。

里見さんが将棋に出合ったのは五歳のときでした。

ある日、父親と兄が将棋をしていました。動き方のちがういろいろな種類のこまを使って、せめたり守ったりしています。ためしにやってみると、おもしろくてたまりません。ようち園から帰ると、兄をつかまえていっしょに将棋を指す毎日が始まりました。

2008年(平成20年)11月24日 月曜日

大山名人杯倉敷藤花(女流)に16歳の里見香奈二段が挑戦した一週16期  
 清水市代倉敷藤花(女流)に16歳の里見香奈二段が挑戦した一週16期  
 大山名人杯倉敷藤花(女流)に16歳の里見香奈二段が挑戦した一週16期  
 主権)のタイトル戦3番勝負第2局が二十三日午前十時から、倉敷市中央の市芸  
 文館で行われ、午後三時四十九分、先手の里見二段が133手で清水倉敷藤花を  
 破り、2連勝で初タイトルを手にした。両者とも持ち時間90分を使い切った。  
 (13、22面に関連記事、3面に「ひと」)



# 16歳里見 最年少藤花

## 清水破り初タイトル

里見二段は高校2年生。16歳8カ月での初タイトルは林葉直子元女流名人、中井広恵女流六段に次ぐ三番目の年少記録で、倉敷藤花としては史上最年少。里見二段の先勝で迎

里見 香奈(せな、かな)は、倉敷市生まれ。小学6年生で将棋を始め、女流育成会を経て2004年、中学1年で女流プロ(2級)に昇格。昨秋、非タイトル戦のレディーズオープン・トーナメント決勝3番勝負で内理学院女流名人に1-2を奪われた。昨年は2度の挑戦者決定戦で涙をのんだが、タイトル初戦となる今回の倉敷藤花戦を制した。得意戦法は中飛車。倉敷市出身。16歳。

(山陽新聞二〇〇八年十一月二十四日)



小学三年生のとき、里見さんの将棋人生を決めるできごとがありました。出雲市で開かれた「将棋の日」のイベントでのことです。里見さんは、会場をかけ回り、プロの棋士たちに質問しもんしました。

「どうしたら将棋が強くなれますか。」

その質問にしんけんに答えてくれたのは、高橋たかはしやまと和さんでした。高橋さんは、そのとき女流二段だんでした。

「毎日、少しずつでいいから、つめ将棋を解とくといいですよ。でも、必ず毎日ですよ。」

高橋さんと指切りげんまんをしました。

それから、里見さんは「一日十問解く」「終わるまでねない」と決め、毎日将棋の勉強をしました。しだいに、それは習慣しゅうかんとなり、将棋をしないと一日が終わったと思えないほどになりました。六年生の修学旅行しゅうがくにも小

さなつめ将棋の本を持っていき、空いた時間にこっそり問題を解きました。高橋さんとの約束を守り続けたのです。

やがて、さまざまなお子様も将棋大会や大人も参加する大会で優勝するようになって、その実力ひきょうが評判はんぱんとなりました。

そしてついに五年生のとき、女流棋士を育てる「女流育成会」から声がかかりました。

東京で開かれる育成会には全国からプロをめざす人が集まって、将棋のうでをみがき合います。対

戦で上位の成績をあげると、念願の女流プロへの道が開くのです。

土曜日、学校から帰って夕食をとり、夜七時十分に出雲駅から深夜バスで東京に出発。日曜日の朝、東京の育成会会場に行き、一日中、全国のメンバーと対戦します。その後、夜八時に東京を出発して、月曜日の朝に出雲に着き、そのまま小学校に登校するという、ハードな生活が始まりました。

小学生がこの生活にたえられるだろうか。体をこわすのではないだろうか——と、周りのだれもが心配しました。里見さんも、ときどきさびしくなることがありました。

(友達とどこかに出かけたい。)

(友達ともっと話をしたい。)

(自由な友達がうらやましい。)

しかし、里見さんはこのきびしい生活にたえ続けました。

育成会に入って一年、里見さんは中学一年生のときに、女流プロ棋士になりました。高校二年生で最年少藤花となった後も、次つぎとタイトルをかく得し、日本中がその活やくに注目しました。

(撮影 弦巻勝)

その後、里見さんは女性に限られた「女流棋士」の世界から、男性と女性が混じる、さらにきびしい「棋士」の世界へ挑戦を始めました。

十九歳で「奨励会」の入会試験に合格。奨励会には



プロをめざす男女が全国から集まります。そこでの対戦で好成績をあげ、二十六歳までに四段になると、プロ棋士になれます。ひとにぎりの人にしかチャンスはありません。

女性会員で初めて奨励会三段をとったとき、里見さんは二十一歳でした。会の決まりで、二十六歳の誕生日までに四段をとらなければ、夢をあきらめなくてはなりません。

ところが、ここにきてなかなか勝つことができなくなりました。将棋ばんに向かうこと一日十時間。それでも、強い相手には歯が立ちません。これまで必死で勉強してきた技が簡単には通用しないのです。

「これまでの私の人生の中で、今いちばん行きづまっています。」

里見さんの口からぼろりと、こんな言葉が出ました。

「今は、自分の好きなことをやらせてもらっているのに、負けるたびに将来への不安がおそってきます。」

負けの連続に、苦しみとあせりの日々が続きます。

「考えて、考えて。なやんで、なやんで。自分で選んだ道です。いちばん自分のやりたいことです。だから、今はただ一生けん命に前へ進んでいくだけです。」





第16期  
倉敷藤花戦

この一戦に勝利し、16歳で初めてチャンピオンになった。



青いタオルがトレードマーク

里見さんは対戦するとき、いつも青いタオルを持っていた。



数え切れないほどのカップや賞状  
自宅には今までにかく得した、カップや賞状がならぶ。



多くの報道陣が囲む中でのタイトル戦

里見さんの対戦は常に注目の的。

(撮影 弦巻勝)

<p><b>プロ棋士(男性と女性)</b> 「奨励会」に入り、4段になるとプロになれる。(26歳まで)</p> <p><b>7大タイトル戦</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①竜王戦</li> <li>②名人戦</li> <li>③王位戦</li> <li>④王座戦</li> <li>⑤棋王戦</li> <li>⑥王将戦</li> <li>⑦棋聖戦</li> </ul> <p>※里見さんは、平成25年12月に3段になった。</p>	<p><b>女流プロ棋士(女性のみ)</b> 「研修会」に入り、2級になると女流プロになれる。</p> <p><b>6大女流タイトル戦</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①マイナビ女子オープン</li> <li>②女流王座戦</li> <li>③女流名人位戦</li> <li>④女流王位戦</li> <li>⑤女流王将戦</li> <li>⑥倉敷藤花戦</li> </ul>
---	--

棋士と女流棋士

将棋の世界には、2種類のプロがいる。



つめ将棋 (将棋のルールを用いたパズル)

小学校3年生から解きはじめて里見さんは、今でも毎日欠かさず解いている。

(出典 高柳詰将棋選集 日本将棋連盟)

# 5

## 高瀬川に

## こめられた思い

## 大梶七兵衛と荒木浜



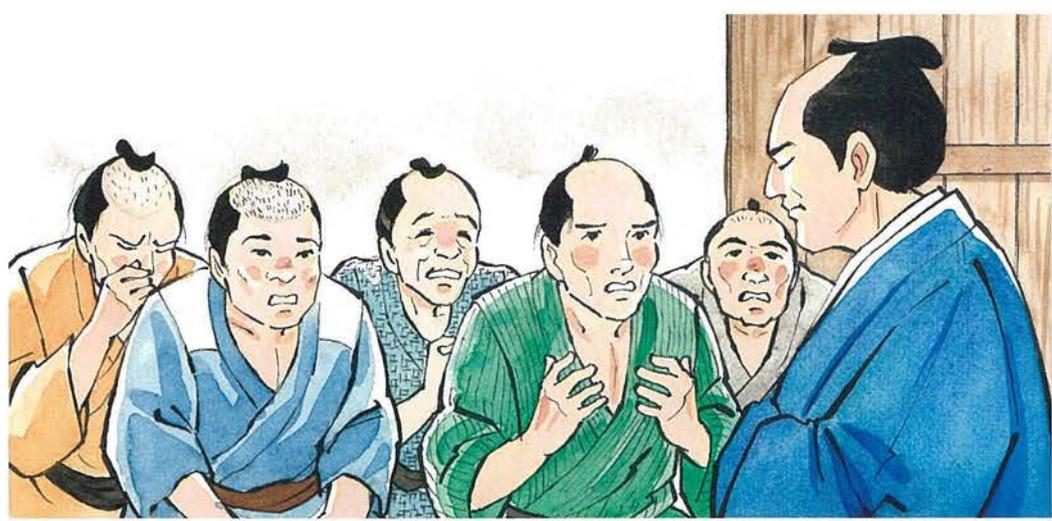
大梶七兵衛の像

いずも  
出雲市



### 大梶七兵衛と荒木浜の工事について

元和7 (1621) 年	古志村 (今の出雲市古志町) に生まれる。	貞享4 (1687) 年	差海川、高瀬川が完成する。
寛永16 (1639) 年	大洪水に見まわれ、斐伊川が流れを変える。	貞享5 (1688) 年	十間川の工事を始める。
寛文13 (1673) 年	湊原八通り (今の荒木地区) に松を植え始める。	元禄2 (1689) 年	十間川が完成する。 七兵衛亡くなる。
天和4 (1684) 年	高瀬川の工事を始める。	元禄12 (1699) 年	七兵衛の孫、大梶忠佐衛門が、 来原岩樋 (高瀬川の取水口) の工事を始める。
貞享3 (1686) 年	差海川の工事を始める。	元禄13 (1700) 年	来原岩樋が完成する。



今からおよそ三百年前、日本海に面した荒木浜（今の大社町荒木）あたり一帯の土地は、広い砂浜で水にめぐまれず、作物を作るところか、人も住めないあれ地でした。

「苦しい生活はもうこりこりだ。もう少し土地があれば。」

「荒木の土地が田や畑になると、生活も楽になるのになあ。」

古志村（今の出雲市古志町）の地主であった大梶七兵衛は、農民たちの話を聞いて、心をいためていました。毎年、思うように米がとれず、人びとは貧しい生活を送っていたのです。

（よしっ、荒木を開たくして、田や畑を増やそう。この土地が豊かになれば、人びとは幸せになる。自分のすべてを、この土地の開たくにささげよう。）

決心した七兵衛は、荒木を開たくを松江藩に願い出て、許しを得ました。

まず、農民といっしょに、風を防ぐかき根を作り始めました。しかし、日本海からふきつける強風が砂浜の砂を動かし、かき根はすぐにうもれてしまいます。

うまったかき根の上にさらに新しいかき根を作りましたが、やはり何度くり返しても砂にうずもれてしまうのでした。

（風が強くてだめか。）

くじけそうになりながらも、ねばり強く作業を続けると、やがてそこは大きな砂山になりました。

様子を見ると、砂山の内側では風が弱くなっています。そこで七兵衛は、砂山の内側にねん土のかた

\*1 開たく…あれ地や山林を開いて耕地にすること。

\*2 かき根…土地をへだてる囲いや仕切り

まりをつけた松のなえを一本一本、ていねいに植えていきました。

手入れを続けた松は、ゆがみながらも立派に成長し、強い風をさえぎり、砂の動きをすっかり止めることができるまでになりました。

気がつけば十年という時が過ぎていました。

「やっと、この広い土地を開たくするときがやってきた。」

まず七兵衛は、先祖代々住みなれた地から荒木に移り住みました。そして、たくさんの人を集めて開たくにとりかかりました。

あれた土地を耕す作業には、想像をはるかにこえる苦労がありました。たえられずにげ出す人もいました。しかし、七兵衛はあきらめずに、人びとの心を支え、はげますことに全力を注ぎました。

「自分たちの苦労が、後の世に続く人のために必ず役に立つ。この苦労を共にする仲間と助け合い、豊かな土地へと変えるのだ。」

やがてにげ出す人は減り、開たく地が見事に広がっていきました。

次に、この土地に水を引くために、八キロメートルもはなれた斐伊川から水を引き、新しい川をつ



くることを考えました。荒木をいねが実る村に、という願いをかなえるには、田をつくらなければなりません。そのためには、たくさんのお水があるからです。

「あんな砂地に川をつくるのができるのだろうか。お殿様でもできなかつたのに。」

「水が勢いよく流れれば、てい防はすぐにくずれてしまうぞ。」

「どこから水を引いてくるっていうんだ。」

だれも、この仕事が成功するとは思っていませんでした。

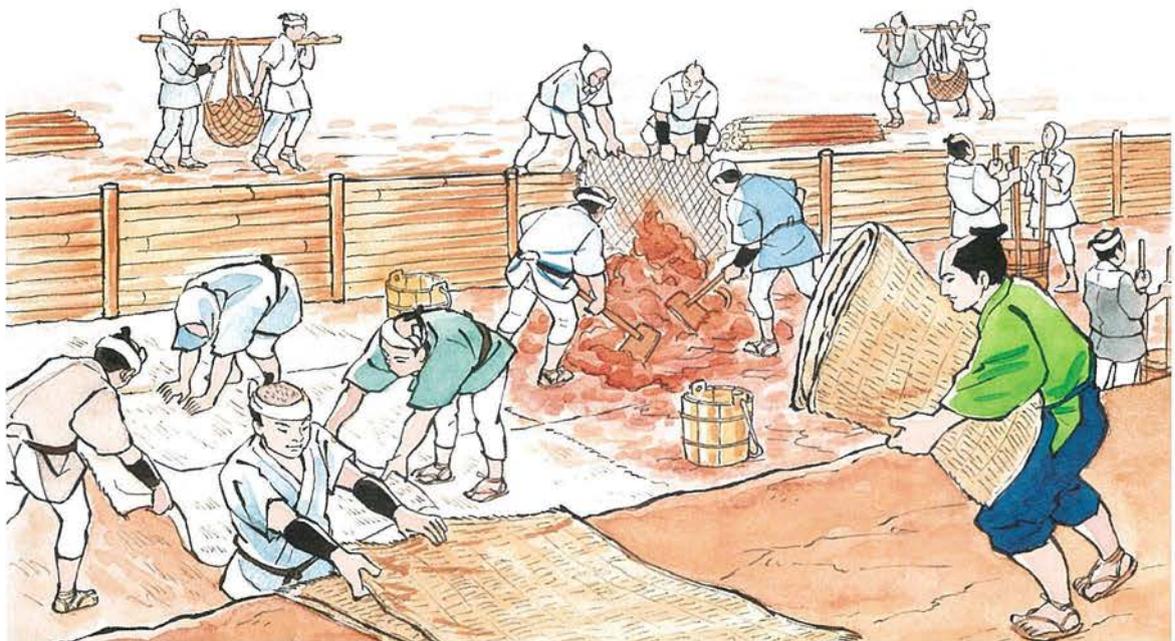
何度かみぞをほって水を通してみましたが、てい防はくずれ、水はすぐ砂地にすいこまれてしまいます。

(水が砂地にすいこまれないようにするためには、どうしたらよいだろう。)

七兵衛はなやみ続けていましたが、あるとき、松のなえを育てるためにねん土を使ったことを思い出し、ねん土で川底を固めることを考えました。しかし、ねん土だけではすぐわれ目が入ってしまいます。

そこで七兵衛は、農民にいぐさやわらを使ってむしろをたくさん作らせました。そして、幅七メートル、深さ一メートルにほった川にむしろをしき、ほどよく水をしみこませたねん土を入れて、しっかりと固めました。

この仕事はとても手間がかかりました。一日に十五メートル進めばよいほ



\*3 いぐさ……くきは糸のように細く、たたみ作りに使われる。

\*4 むしろ……いぐさやわらなどで編んだしきもの。



今も栄える出雲平野

うです。また、お金もたくさん必要でした。七兵衛は自分の財産をほとんど使  
い果たし、くらしが苦しくなりました。長年にわたる工事で、七兵衛の頭には  
しらが混じるようになりましたが、昼も夜もなく、みんなの先頭に立って働  
きました。

川をつくり始めてから、三年がたちました。新しい水路に水を通す日が、つ  
いにやってきたのです。水は、ねん土で固めた川を、すべるように流れました。  
「やったぞ、成功だ。七兵衛さん。」

「ありがとうございます。七兵衛さん。」  
人びとは、だき合って喜びました。七兵衛は、多くの水が流れていく川をじ  
っと見つめていました。

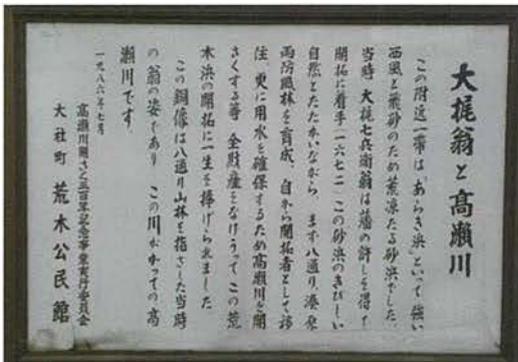
この大事業のあと地は、今も出雲平野の西部一帯にわたって当時のおもかけ  
を残し、今もなお、ここに住む人びとの豊かなくらしを支え続けています。

荒木地区周辺の様子



※は、大梶七兵衛がつくった高瀬川

出雲平野には、東に斐伊川、西に神戸川と大きな二つの川が流れていた。江戸時代のある年、毎日続く大雨で家も畑も流されていた。この大水で西の日本海に流れていた斐伊川は東へと流れを変えた。流れを変えた斐伊川のは東へ、田んぼにも畑にもならないあれ地で水を引くこともできなかった。そこが、現在の荒木地区である。



高瀬川

用水路だけでなく、高瀬舟を使って物を運ぶなど、交通がいろいろ便利になった。



大梶七兵衛の像や碑

偉大な功績を残した大梶七兵衛の像や碑が、出雲市内にいくつか見られる。



現在の高瀬川

全長約8キロメートル、川幅約6メートルの用水路である。



現在の荒木浜の松

ねん土をつけた松の苗は、10年たつと、強い風を受けてゆがみながらも立派に成長した。

# 6

## おおもり 大森から世界へ

なかむら  
中村ブレイス社長  
中村俊郎さん  
としろう



### 中村俊郎さんについて

- しょうわ 昭和23 (1948) 年 おおだ おおもり 大田市大森町に生まれる。
- しょうわ 昭和41 (1966) 年 おおい 大井義肢製作所 (京都市) に入社
- しょうわ 昭和47 (1972) 年 モダン・オーソペディック社 (アメリカ・カリフォルニア州) に入社  
カリフォルニア大学メディカルスクールで学ぶ。
- しょうわ 昭和49 (1974) 年 中村ブレイスを創業
- しょうわ 昭和57 (1982) 年 世界初シリコーン製インソール (くつの中じき) を発売
- へいせい 平成7 (1995) 年～ こくさい 国際義肢装具連盟 (インターボア) 日本代表になる。

おおだ  
大田市





上の写真を見てください。手前の左手だけが本物の人間の手で、ほかはシリコーンという素材を使って本物そっくりに作られた義手です。

この義手は、島根県大田市大森町にある会社「中村ブレイス」で作られました。社長は中村俊郎さん。中村ブレイスでは、事故や病気などで失った体の一部や、その機能を補うために体につける義肢装具を作っています。高い技術と細やかな心配りで、本物に限りなく近い状態を実現した中村ブレイスの装具に、日本全国だけでなく世界中から注文が届きます。

中村さんは、世界遺産で有名な石見銀山のある大森町に生まれ育ちました。

「石見銀山とマルコポーロとを合わせて考えるとおもしろいぞ。」

「俊郎、自分の道は自分で切りひらけよ。」

と、ことあるごとに話す父親のえいきょうで、中村さんは、まだ見ぬ遠い海外にあこがれるようになりました。

高校卒業後、中村さんは義肢装具製作の道に進み、京都の会社で一生けんめいに仕事をしました。仕事で大学病院に行くことが多かった中村さんは、体の一部を失った人たちのための製品の注文を受けながら、医りよう分野の最新情報を知ったり、外国で学んだ医師の話の聞いたりするのが楽しかったです。そんな中で、若い医師たちのじゅう実した仕事ぶりを見て、ふと思うことができました。

（義肢装具について、もっともっと学びたい。でも、日本には学校がない。教科書や参考書さえもな

い。見よう見まねで学ばかりでいいのだろうか。

ある日、その思いを、親しい医師にぶつけてみました。しっかりと話を聞いてくれた医師は、しばらく考えてこう言いました。

「いいなあ、中村さんは幸せだ。今から自分で道をつくっていけるんだから。」

この言葉をきっかけに、中村さんは義肢装具についての高い技術を学ぼうと、アメリカに留学することにしました。留学後は、京都の会社をやめて、アメリカで働きました。アメリカでは働きながら大学にも通い、新しい知識や技術を次々と身につけていきました。

昭和四十九（一九七四）年十二月、帰国した中村さんは、ふるさと大森町にある自宅の納屋をつくりかえて、たった一人で義肢装具会社「中村ブレイス」を開業しました。二十六才でした。しかし、仕事は全くなく、雪かきばかりをする日々が続きました。

中村さんはそのころのことを「がけっぶち」だったと言います。それでも、厳しい状況じようになればなるほど、自分の大きな夢ゆめを考えました。

（かつて石見銀山が銀の輸出ゆしゅつを通じて世界の人々にこうけんしたように、人の役に立つ義肢装具を作って、大森から世界へ輸出ゆしゅつしていくんだ。）

そう思うと、つらいことも乗りこえられる気がしていたのでした。

開業して十年目。中村さんにあるアイデアがひらめきました。

(シリコーンという素材を、くつの中じきに利用してみてはどうだろうか。)

それまで、足の不自由な人の治りように使われる中じきで、シリコーン製のものはなかったのです。(シリコーンは、はだに優しく、だん力があり、じょうぶだ。くつの中じきとして使えば、装着のときに感じる痛みも少なく、長持ちするし、きつといいものができる。)

そのころ、十五名になっていた社員とともに、毎日毎日研究に取り組みました。世界でまだだれも手がけたことのない試みでした。

ところが、ここで一つの問題にぶつかりました。石こうの型わくが、シリコーンの熱ですぐに割れてしまうのです。なぜ、うまくいかないのか、どうすれば解決するかと、考えられる限りの問題点を出し合い、研究を重ねました。一つ問題を解決するたびに、乗りこえなければならぬ課題が次つぎと生まれました。

(これでもだめか。製品化するのは、やはり無理なのではないか。)

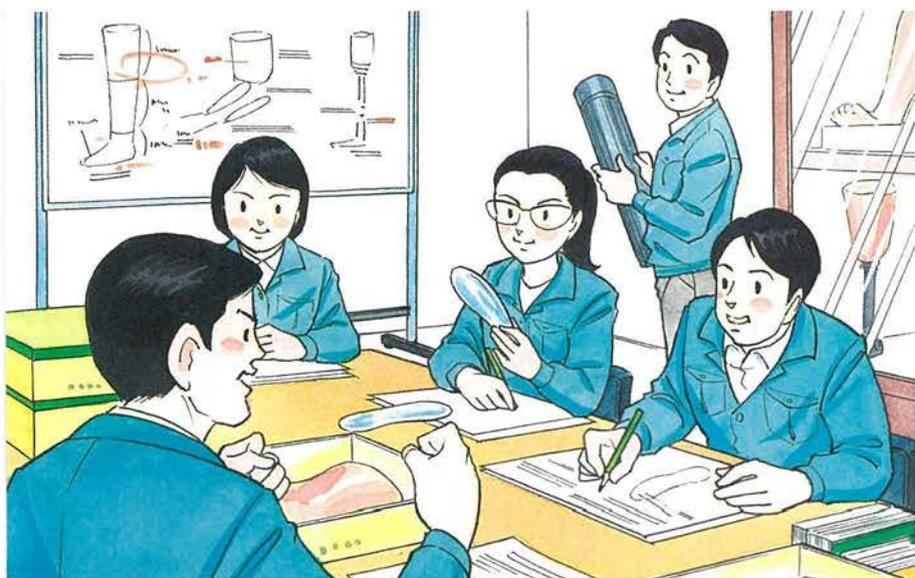
弱気な心におそわれることもありましたが、しかし、中村さんは患者さんの支えになりたい、と絶対にあきらめず、

「やれるぞ、やるぞっ。」

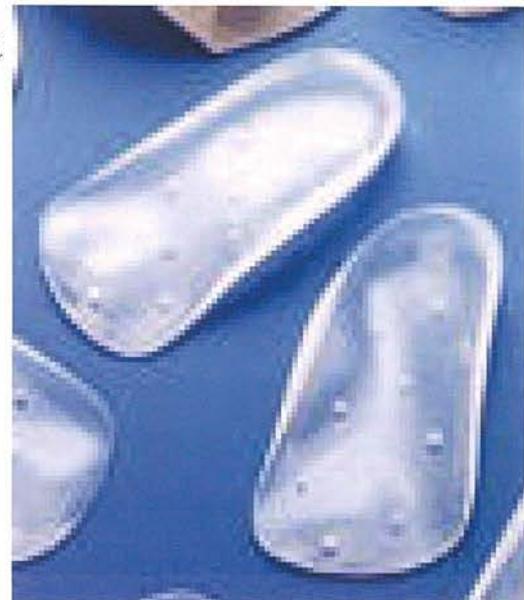
と自分に言い聞かせ、社員をばげましながら開発を進めていきました。

それから三年の月日が過ぎました。

ついに世界初のシリコーン製の中じきが発売されることになりました。この中



じきは世界中から注目され、今も多くの人々に利用されています。これをきっかけにシリコーン製品の開発が一気に進みました。本物と見分けがつかないほどそっくりに作られる義手や義足。シリコーンを使って、はだの色やしわ、毛の一本一本まで考えて、ていねいに作り上げる製品は大評判を呼びました。



歩く練習をするアンヘルト君

世界中にいます。

中村ブレイスには世界中の患者さんからお礼の手紙が届きます。

「歩いたり友達と遊んだりすることは、夢だと思っていました。でも今は、その夢が実現したのです。ぼくも、ぼくの助けを必要としているほかの人たちを助けたいと思います。そして、みなさんがくださったいちばん大きなおくり物を大切にします。ありがとうございます。」  
(アンヘルト君、十二才、フィリピン)

今も、中村ブレイスの製品を使って夢の実現に向けて歩んでいる人が

中村さんは今も新たな製品を開発中です。そして、それができれば新たに多くの患者さんに喜んでもらえるはずだと語ります。

(大森から世界の人に役立つ義肢装具を作って輸出する。)

という中村さんの夢は、さらに大きく広がっています。



できたばかりの会社で  
はじめはほとんど仕事がなかった。



京都の大井義肢製作所で働く中村さん  
昼間は仕事、夜は大学で勉強を続けた。



世界中から届く感謝の手紙  
手紙を読むと、難しい課題にチャレンジする  
エネルギーがわく。



中村ブレイスで  
製作された義足  
患者さんに合う  
ものをていねい  
につくる。



中村ブレイス本社  
大田市大森町にある。平成26年現在、社員数  
約70名。世界各国から注文がくる。



シリコンで作られた義肢の数かず  
はだの色や、つめの形は一つ一つ違う。患者  
さんの注文に応じた手指の製作には3か月く  
らいかかる。

# 7 ひとすじのなみだ

イルティツシュ号漂着と和木の人びと



## イルティツシュ号について

- 明治37 (1904) 年2月8日 日露戦争が始まる。
- 明治38 (1905) 年5月27日 日本海海戦で日本が勝利
- 同年5月28日 ロシアの軍かんイルティツシュ号が和木の浜へ漂着
- 同年9月5日 日露戦争が終わる。
- 明治39 (1906) 年5月 和木小学校でロシア祭りが始まる。
- ※途中、第二次世界大戦で中断。昭和23 (1948) 年に復活するが、昭和47 (1972) 年に和木小学校が廃校になり、ロシア祭りは廃止された。
- 平成7 (1995) 年5月28日 イルティツシュ号乗組員救えん90周年記念式典。この年から、ロシア祭りが復活する。

江津市



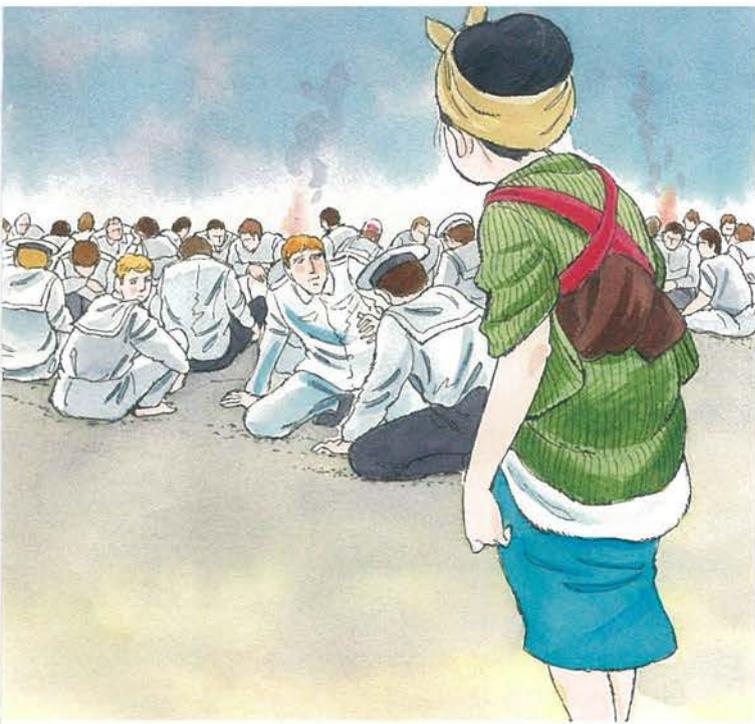
明治三十八（一九〇五）年五月二十八日、ロシアの軍かんイルティッシュ号が、真島（今の江津市和木町）のおきでちんぼつしそうになりました。そのころ、日本はロシアと戦争をしていました。日露戦争です。戦いで大きな損傷を受け、これ以上船を進めることができなくなったイルティッシュ号は、真島のおきへにげてきたのです。前日、対馬おきではげしい海戦があり、ロシアのかん隊はほとんど全めつしてしまったのでした。

しずみかけた船からボートに乗りかえた水兵たちが、和木の浜へ上陸しようとしていました。イルティッシュ号はロシアの軍かんですから、乗っている水兵たちは敵兵です。その敵兵が和木の浜へ向かってくるのを見て、人びとは不安になり、おそれる人、こわがる人、戦おうとする人、それぞれがあわてふためき、大さわぎになりました。前日に対馬のおきで大きな戦いがあったことなど、和木の人たちは全く知らなかったので、なおさらです。

その日は、風が強く波も高かったので、ロシアの水兵たちはボートに乗って上陸するのにとても苦勞していました。よく見ると、かれらは白旗をかかれています。白旗は負けをみとめることを意味しています。敵がせめてくると思っていた和木の人たちは、それを見て、ロシア兵が助けを求めているのだとわかりました。



\*対馬：日本の九州と朝鮮半島の間にある、長崎県の島。日本海海戦は、その島がある対馬海峡が舞台となった。



強風にあおられて大きくゆれるボート。海に投げ出される水兵たち。このままでは死んでしまうと、浜にいた男たちは次つぎに冷たい海に飛びこんで、ボートを岸へと引っ張りました。やがて、女たちや子どもたちまでもが、波にもまれながら兵士たちの上陸を助け始めました。

陸へ上がってくる水兵の中にはけがをしている人がいて、頭や手足にまいた包帯に、真っ赤な血がにじんでいる人もいました。足を切断せつだんされてうめき苦しむ人もいました。

和木の人たちは、今まで見たことのない大勢おおぜいのロシア人たちを、とまどいながらはなれたところできがめていました。しかし、ロシア兵たちが痛みいたに顔をしかめ、寒さにふるえる姿すがたを見て、少しづつかれらに近づいていきました。浜では、冷えた体を温めるために、かき集めた流木を使って、いくつものたき火がたかれました。

ふと気がつくとき、一人の女性じよせいが、ロシア兵の方へ歩いていきます。浜の近くに住む八重やえでした。八重は数日前に、一人むすこの太郎たろうがロシアとの戦いで戦死した知らせを受けたばかりでした。太郎は、夫を海でなくした八重が女手一つで育てた、じまんのむすこでした。無表むひょう情じょうのまま、ゆっくりとロシア兵に近づいていく八重に向かって、漁師りょうしの長老、仙造せんぞうじいはさげびました。

「八重、やめろ。おまえの気持ちは、わしらにもようわかる。やめろ。だれか、八重を止めんか。だれか、はよう。」



八重ははたと立ち止まりました。そこには、ふるえながらすすり泣く一人の兵士がすわっていました。まだ、十代らしい若い兵士です。八重はしばらく、その若い兵士をじっと見つめていました。見つめられた兵士は落ち着かない様子で、ふるえながらあとずさりを始めました。それから、頭を下げて何かをさげんだかと思うと、その場にふせてしまいました。

そのときです。八重はすわると、ふるえる若い兵士の背中にそっと手を回し、まるでおさない子をだく母のように、そのおねにしっかりとかかえたのです。若者はいっしゅんとまどったようでしたが、すぐに八重にしっかりとしがみつきました。八重に何か言っているようでしたが、言葉にはなりませんでした。見ると、八重のほほには、ひとすじのなみだが流れていました。

仙造じいはいました。

「おい、だれか八重になんかかけてやってくれや。そいでおう、もっと火を燃やせやあ。どんどん木をくべてのう。」

八重の顔はやさしく、ほんのり赤らんで、少しほほえんでいるようでした。「さあ、あんたも食べんさい。体があつたまるけえ。なんもこわいこたあないけえ、さあ。」

八重は、若者の手にぞうすいの入ったどんぶりをにぎらせました。

山の方へにげていた村人たちも浜はまに集まり、村人みんなでロシア兵を助けるために動き回り、必死に世話をしました。そこには、相手は敵兵てきへいだという気持ちには少しもありません。二百人をこえるロシア兵とその荷物が浜に上がったころには、すっかり日がしずみ、辺りは暗くなっていました。

後に、イルティッシュ号の乗組員の一人は、

「日本人はみんな親切にしてくれた。とてもうれしい。」

と、なみだを流したといっています。

イルティッシュ号ひよつちやく漂着ひょうちやくで見せた和木わきの人たちの行動は、百年以上たった今でも、江津市こうつ和木町の人たちによって語りつがれています。そして、今なお、真島ましまのおきの海底には、イルティッシュ号がねむっています。



現在の和木の海。今も真島のおきにはイルティッシュ号が沈んでいる。



イルティッシュ号のロシア兵が  
使ったボート

(撮影 森山善内)

イルティッシュ号にあったもの

(江津市立和木公民館蔵)



信号旗

「我ハ激シク攻撃ヲ受ク」



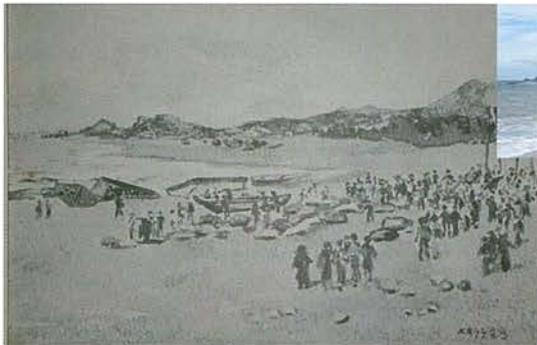
水兵用作業着

負傷した水兵の血  
が染みついている



「露兵の漂着の実況」

露兵とは、ロシア兵を示す。雑誌『軍国画報』  
(明治38年7月)より

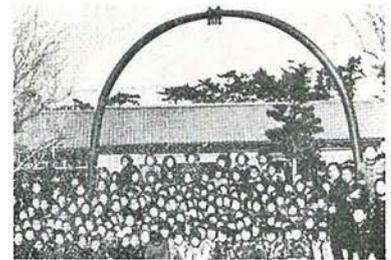


「露兵の漂着」

雑誌『軍国画報』(明治38年7月)より



※現在の和木の浜。  
左の絵と同じ場所。



旧和木小学校校門

イルティッシュ号にあった、救命ボートをつるす  
ための鉄の支柱を引きあげ、向かい合わせにつな  
いでアーチ形に作った門。(昭和18年1月14日撮影)



ロシア祭りに  
参加した江津  
市立高角小学  
校5年生

平成25年5月19日、江津市立和木公民館にて、群  
読「イルティッシュ号と和木の人々」を発表した。



ロシアから贈られ  
た日露友好の時鐘  
平成7年5月28日  
イルティッシュ号  
乗組員救えん90周  
年記念式典にて交  
かんされた。  
(浜田市郷土資料  
館蔵)

# 8

## 夢、大空に向かって

東京スカイツリー®をデザイン監修した澄川喜一さん



(写真 中国新聞社提供 平成21年11月10日掲載)

### 澄川喜一さんについて

- 昭和6 (1931) 年 六日市町 (今の吉賀町) に生まれる。
- 昭和20 (1945) 年 山口県立岩国工業学校に入学する。
- 昭和25 (1950) 年 キジア台風で錦帯橋が流されるのを見る。
- 昭和26 (1951) 年 工業学校を卒業する。
- 昭和27 (1952) 年 東京藝術大学彫刻科に入学する。
- 昭和36 (1961) 年 アトリエを建てる。
- 昭和51 (1976) 年 ヨーロッパで学ぶ。
- 昭和56 (1981) 年 東京藝術大学教授になる。
- 平成7 (1995) 年 東京藝術大学学長になる。
- 平成17 (2005) 年 鳥根県芸術文化センター「グラントワ」センター長になる。
- 平成18 (2006) 年 東京スカイツリー®のデザインを監修する。

※作品、受賞等、たくさんあります。

よしか 吉賀町





東京スカイツリー®

平成二十四（二〇一三）年、東京都に日本の新たなシンボルである「東京スカイツリー」が完成しました。世界一高い自立式の電波とうです。高さは六百三十四メートル、青空に向かってどこまでものびていく大きな木を思わせる姿には、見る人のだれもが圧とうされます。

市町（今の吉賀町）に生まれました。六日市町は、周りを中国山地の山々に囲まれ、町の中心部を清流高津川が流れる自然豊かなところでは、

澄川さんは、小さなころから器用で、絵をかくことが好きでした。グライダーを作れば、どの友達よりも遠くへ飛び、習字の時間に半紙の余白にえがいた似顔絵は、しかられるどころか、

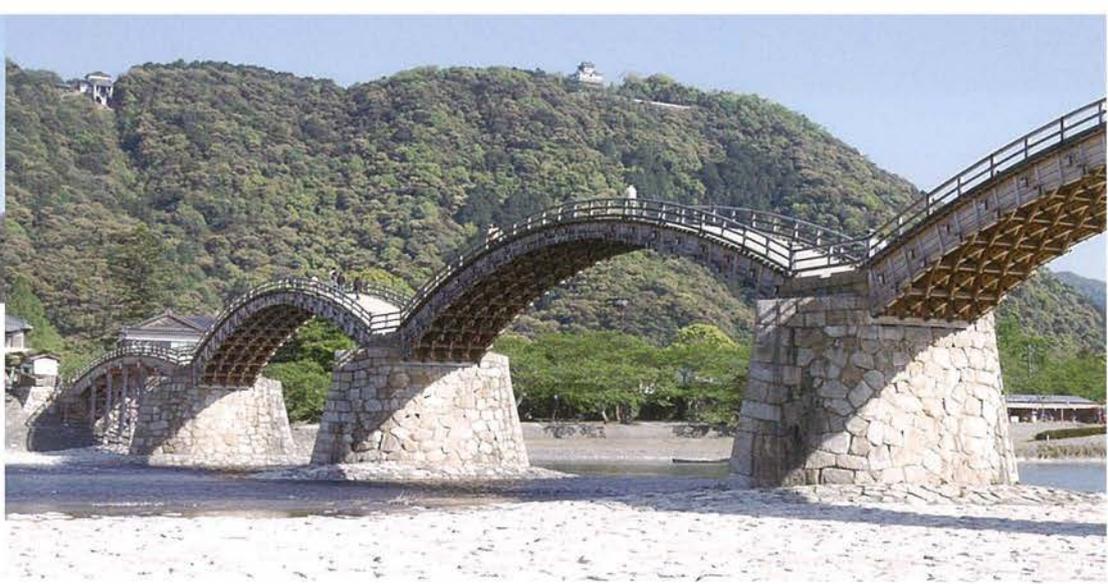
「すごく上手だね、喜一くん。」

と、先生が感心して、丸をつけるほどでした。

澄川さんは、少年時代を山口県岩国市で過ごしました。岩国市には、今から三百年以上も前に造られた「錦帯橋」という木造の橋がありました。



現在の錦帯橋



(なんて美しい曲線なんだろう。)

(大型機械もない時代に、どうやったらかんな形ができるのだろう。)

と、橋の美しさや造り方、技術ぎじゆつについて夢中むちゆうで調べました。強く力がかかるところにはじょうぶな「けやき」、表面には水に強い「ひのき」というように、木の特ちょうを生かして組み合わせられています。

素足すあしで橋をわたると、重みで橋がゆれ、まるで橋と自分が一体になったように感じます。

澄川さんは、こうした錦帯橋のすばらしさにすっかりひきつけられました。そして、時間ができると橋へ出かけ、いろいろな角度から橋の絵をえがき、その絵をもとに橋の模型もけいまで作りしました。

昭和二十五(一九五〇)年九月、大きな台風が岩国市をおそい、川が危険きけん水位すいまで増水ぞうすいしました。

「おいつ、錦帯橋があぶないぞ。」

近所の人のさけぶ声を聞いた澄川さんは、橋に向かって走り出しました。橋の周りにはすでに大勢おおせいの人が集まっていました。橋はもう落ちる寸前すんぜんです。

(この橋が落ちるものか。絶対ぜったいに落ちるはずはない。)  
祈いのるような気持ちで、橋を見守りました。しかし、澄川さんの目の前で、橋は流れにのみ

こまれ、だく流の中にうもれてしまったのです。

台風が去ったあと、澄川すみかわさんは橋の一部を川下で見つけ、思わずかけ寄りよりました。それは、激はげしいだく流にあっても、ばらばらにならなかった木組みのかたまりでした。

(台風に流されても美しさを保たもつ木組み。なんてすばらしいんだ。)

この出会いにより、澄川さんに「芸術家げいじゅつかになりたい」という夢ゆめが生まれ  
ました。

工業学校を卒業する半年ほど前、澄川さんは、両親に気持ちを打ち明け  
ました。

「ぼくは、小さなころからものづくりや絵をかくことが大好きでした。芸術家になることがぼくの夢です。芸術家への勉強をするために、どうか東京の大学に行かせてください。」

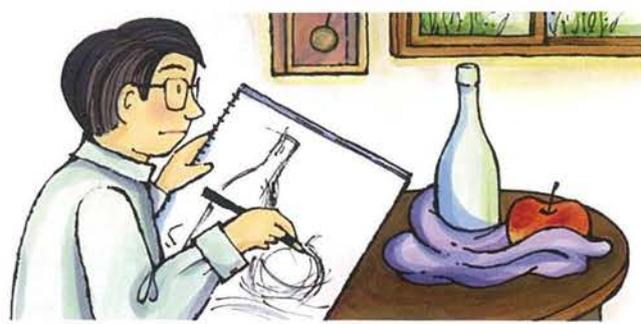
しかし、会社員になることを望む父親の反対はすさまじく、  
「何が芸術家だ。そんなことで、食っていけるわけがないだろう。」

と、みとめてくれませんでした。澄川さんは、泣く泣く地元の製紙せいし会社につとめました。

しかし、芸術を学びたいという思いは、日に日に強くなるばかりでした。半年後、勇気を出しても  
う一度、父親に話しました。



だく流にのみこまれそうな錦帯橋きんたいきょう



「やはり夢をあきらめることができません。大学を受験じゅけんできないのなら、家を出ます。」

そしてついに、受験じゅけんの許ゆるしをもらうことができました。ただし、チャンスは一度きりでした。

「一回だけだ。落ちたら、地元で働くんだ。」

（もう一度、一から勉強しよう。）

澄川さんは家族とはなれて一人、東京で受験勉強を始めました。せまい部屋へやに下宿しながら、学校に通いました。

（一度きりのチャンスだ。死んだつもりになって、全力をつくさなくては。）

必死ひっしでした。勉強がつかなくても、心はいつも前向きでした。そして、父親との約束どおり、一回の受験じゅけんで合格ごうかくを勝ち取ったのです。こうして、芸術家への第一歩をふみ出しました。

「おろち」を製作せいぞうする澄川さん（平成十二年十一月）

八十才を過ぎた今、澄川さんは語ります。

「きっと夢はかなう、そう信じています。そして、これからもぼくは夢を追い求めます。」

澄川さんの故郷「吉賀町」の木である「こうやまき」が、東京スカイツリーのすぐ近くに三本植えられています。スカイツリーのデザインの元になった木です。ツリーの建設けんせつにたずさわったたくさんの人の夢や思いとともに、これからも大空に向かったのびていくことでしょう。





こうやまき

よしか 吉賀町から送られたこうやまきの木が、東京スカイツリーのすぐ近くに植えられている。



およりさんせ

吉賀町に設置されている澄川さんの作品。多くの人に立ち寄ってもらいたいという願いを込めて、澄川さんが自ら命名した。



おろち

島根県芸術文化センター「グラントワ」(益田市)の庭にある澄川さんの作品。大蛇(おろち)がテーマで、前に立つのが澄川さん。



東京スカイツリー® とTO THE SKY  
東京スカイツリーのそばに設置されている澄川さんの作品。3本の柱の間に入ることができ、そこから空を見上げると、タワーの最上部がちょうど、柱の間から見られるようになっている。

(撮影 村井修)

# 9

## 城山桜じょうざんざくらと生きる

生きかえったかねだに金谷のシンボル



### 城山桜について

- ・種類 エドヒガン
- ・樹れい 600年くらいと見られる。
- ・高さ 15メートル
- ・枝張り 東西・南北ともに20メートル

昭和38 (1963) 年 豪雪ごうせつにより、大きなダメージを受ける。

昭和51 (1976) 年 鳥根県天然記念物に指定される。

昭和58 (1983) 年 1回目の治りょうを受ける。

平成元 (1989) 年 大雪で再びダメージを受ける。

平成12 (2000) 年 樹医の大森庸司おおもりようじさんが治りょうを始める。

益田市





見上げると、空がかくれてしまうほど大きく枝を広げる一本の桜の木。ここをおとずれるたぐさんの人は、思わず幹に手をあてて、

「りっぱな桜だなあ。」

と、感動の声をもらします。

その木は、益田市美都町にある「金谷の城山桜」です。樹れい（木の年れい）はおよそ六百年といわれ、ずっと昔から、この地域にくらす人びとにとって自まんいの桜でした。

町のシンボルとして地域の人たちに愛されてきた城山桜でしたが、昭和三十八（一九六三）年と平成元（一九八九）年の二度の大雪で、たぐさんの枝が折れてしまったのです。

平成十二（二〇〇〇）年ごろになると、木のくさった部分にきのこがたぐさん生えたり、幹の中に大きな穴が空いたりしていました。花はさいても、その数はずいぶん少なくなっていました。

「このままでは、桜の木が——。」

城山桜は、だれが見てもひどい姿になっていました。その様子を見て心配した町の人の呼びかけで、県内に住む樹医（木の医

者)の大森庸司おのもりようじさんに、治りようをお願いすることになりました。

町の人に案内されて、大森さんは初めて城山桜を見ました。大人五人が手をつないでやっと届くほど太い幹を見て、大森さんはその大きさに圧とうされました。さらに、桜の歴史を知ると、自分がまるでほこりのようにちっぽけな存在に思えたそうです。

(今までよく生きていてくれた。)

さっそく調査をしたところ、城山桜は相当きび厳しい状態じょうたいであることがわかり、大森さんは急いで治りようを始めました。

(この木の『治ろうとする力』、『生きようとする力』を引き出す手伝いをしたい。)

大森さんは、木が弱ってしまった原因げんいんを一つ一つ取りのぞいていきました。くさった部分をけずり、生えていたきのこが増えないように薬を入れ、幹に空いた穴にはくだった木炭をつめました。木の状態を細かく見ているのは治りようを行い、手当てした場所は全部で二十か所にもなりました。大きな木なので、治りようをするのは大変でした。それでも、大森さんは、あきらめずに、一つ一ついいねいに治りようを進めました。

(大丈夫だいじょうぶ。きっと来年も桜の花をさかせることができるから。)

まるで大きな手術しゅじゅつが行われているような城山桜の治りようを、町の人たちはいのるような気持ちで



大森庸司さん



やさしく見守り続けました。

そして次の年の春。一度はあきらめかけた城山桜じょうざんざくらに満開の花がさきました。

「よくさいてくれた。ありがとう。」

「あんな状態じょうたいだったのに、よくがんばったな。」

町の人たちは喜び、城山桜の生きる力に心から感謝しました。

おもり 大森さんは、その後、いく度も城山桜に足を運んでは、木が元気になっていく様子を確かたしめています。毎年四月に、こぼれ落ちそうなくらいの花をつける城山桜を見ると、安心するのだそうです。

「木に会いに来て力をもらう人や、自分のことのように木を守り、共に生きようとする人が確かく実に増くわえています。そんな人たちとの出会いや、数百年生きぬいて、再び勢いきほいをもり返す木の生命力に、わたしもはげまされています。」

今では毎年、桜の時期になると、地元だけでなく、県外からもたくさんの方が美しい城山桜をなが



めにやってきます。

城山桜のそばに、一冊さつのノートが置かれています。桜を見にきた人が、その思いや感想を書くためです。ノートには、城山桜と出会った感動がぎっしりと書かれています。

今日も、城山桜は人びとと共に生きています。

城山桜の治りようの様子



- ①枝や幹の中のくさった部分をけずり出す。
- ②できた穴に殺菌剤を注入する。



- ③穴の中に、空気のしつ度を調節するための木炭をセットする。(木炭は、しつ気を吸ったりはいたりして、くさるのを防ぐ働きをする。)



- ④穴にステンレス板のカバーをかけ、雨が入らないようにする。
- ⑤穴に絶えず空気が出入りするよう、板の下側に通気口を作っておく。



益田市金谷地区

周辺におよそ400本の桜が植えられている。ボタン桜にソメイヨシノ、そして何と言っても城山桜。桜の時期になると、県内ばかりでなく、県外から1000人をこえる人がおとずれる。ゆずの栽培も有名で、およそ900本のゆずの木が、山の斜面にびっしりと植えられている。写真は、城山桜から見下ろす金谷地区の様子。



桜祭り

毎年4月に開かれる桜祭りは、大勢の人でにぎわう。

# 10 トンネルにたくした運命

沖田を救った長嶺嘉左衛門



←↑ 嘉左衛門がほったトンネルの現在の様子



## 長嶺嘉左衛門と水路について

- 宝永元（1704）年 水路の工事始める。
- 宝永4（1707）年 水路の工事終わる。
- 宝永7（1710）年 6月10日、長嶺嘉左衛門死去
- 明治42（1909）年 7月、高津大元神社に記念碑を建てる。
- 平成14（2002）年 水路の近く（現在の場所）に記念碑を移転させる。

益田市

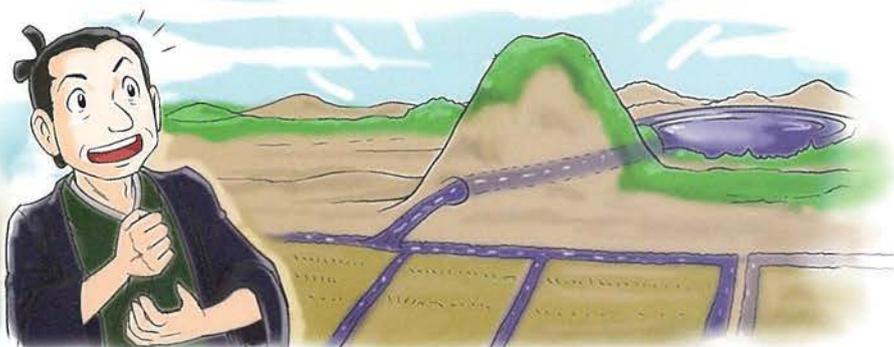




をほろうと考えたのです。  
トンネルをほるには村人の協力が必要です。しかも山の岩のかたさを考えると十年はかかり  
そうでした。

ある日、田んぼを見回っていた嘉左衛門に一つの考えがうかびました。  
(ばんりゅう 蟠竜湖から水路をほって水を引けば――。)

江戸時代の中ごろのことです。高津村沖田(今の益田市高津町、県立益田翔陽高校のあたり)に広がる地区)は、毎年のように水不足でこまっていました。沖田の田んぼは、そばを流れる高津川より高いところにあるため、高津川から水を引くことができず、となりの中西村(なかにし)から用水路で運ばれる水にたよっていました。しかし、全長四キロメートルもあるこの水路は、安定して水を引くことができませんでした。たびたびこわれ、水の流れが止まることも多く、そのたびに田んぼはひびわれ、いねがかれてしまうのです。「せっかく植えても、いねがだめにならあや。」  
「なんとかならんもんかのう。」  
水不足を解決したいというのが、沖田の人たちのいちばんの願いでした。そんな村人たちの思いを知って、庄屋の長嶺嘉左衛門(ながみねかざえもん)もなやんでいました。



(村人たちに何とかこの計画を理解してもらおう。)

嘉左衛門は強く決意しました。

しばらくして、嘉左衛門は、村人たちに計画を話しました。

「この水路が完成すれば、もう水不足になやむことはなくなるんじゃない。いつときの苦勞じゃけえ。ここで、みんなで力を合わせるこたあできんかね。」

村人たちも、水路を通すことができればどれほど助かるか、よくわかっていました。一方で、トンネルをほることがどれほど大変かも知っていました。

「あの山をほるには、かなりきりがあるけえなあ。」

「それに、わしらにやあ田んぼや畑の仕事もあるしのお。」

嘉左衛門は毎晩、村人たちのところに行き、水路の大切さを熱心に話しました。そんな嘉左衛門を見て、村人の気持ちも変わっていきました。嘉左衛門のねばり強い説得と熱意が、村人たちの心を動かしたのです。

トンネルは、山の両側からほることになりました。五年以内に水路を完成させるためです。しかし、問題がありました。

(穴の方向をそろえることはできるだろう。だが、両側からほった穴がずれてしまったら――。)

嘉左衛門は、目を閉じて静かに自分自身に問いかけました。

(失敗したらわたしが責任を取ろう。しかし、成功したら沖田の村は豊かになる。)

目を開いた嘉左衛門の前に、蟠竜湖の湖面がきらきらとかがやいていました。

宝永元（一七〇四）年、工事が始まりました。トンネルの出入り口にろうそくをともし、その光をたよりにほり進めました。今のように大きな機械やダイナマイトもなく、のみとつるはしだけでほるのですから、なかなか進みません。かたい岩のため、三日間で一メートルさえ進めないこともありました。また、かべがくずれることもありました。二百メートルというわずかなきよりでしたが、工事は思ったよりずっと大変でした。

「本当に水路ができるのだろうか。」

村人たちは心配になりました。

「みんな、がんばってくれ。水不足で苦しむのはもうおしまいにするんだ。」

そう言って嘉左衛門は、自分ものみを持ってほり続けました。

工事を始めて四年目の冬がやってきました。すでに、藩はんからもらったえん助のお金は底をつけていました。しかし嘉左衛門は、自分の財産ざいざんのすべてを投げ出すかくごを決めていました。

工事は進み、いよいよ両側からほり進めたトンネルがうまく出合うかどうか、最後の作業をむかえました。もし、二つのトンネルが出合わなければ今までの苦労がすべて水のあわになります。嘉左衛門はいのりながら、ただひたすらにほり続けました。

しかし、なかなか嘉左衛門のもとにうれしい知らせはとどきません。



(だめだったのか。)

嘉左衛門にもあきらめの気持ちがあがっていました。

そんなある日のこと。いつものようにトンネルの中で、村人がかたい岩に向かってのみをふるってるときです。岩をくたく音の中に、自分ののみ音ではない「コツコツ」という音が聞こえました。しばらくのみの手を休めていると、人の声が聞こえたような気がしました。

「も、もしや。」

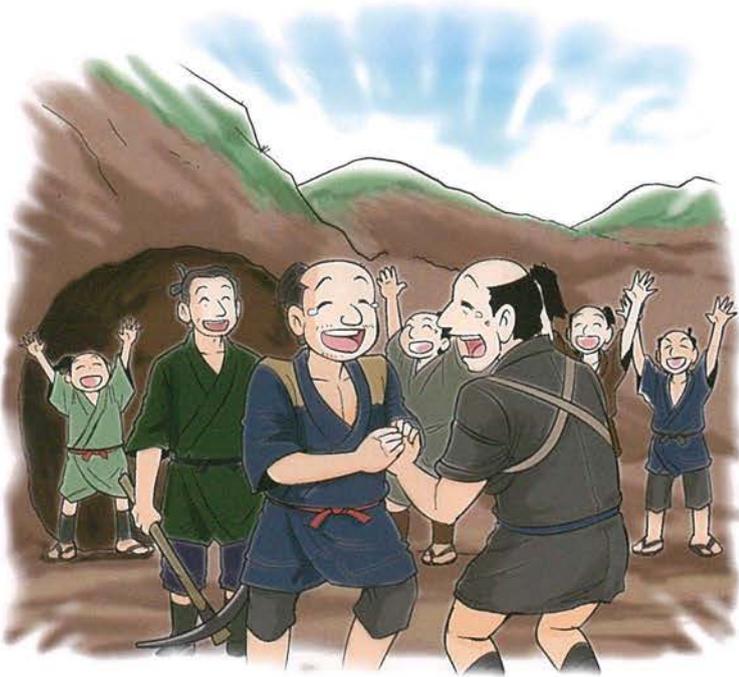
「おおい、聞こえるかあ。おおい。」

すると、岩の向こうから、

「おおい、聞こえるぞう。聞こえるぞう。おおい。」

喜びの音がトンネルの中にひびきわたりました。村人たちはなみだを流して手を取り合いました。嘉左衛門は、そんな人々の様子を見ながら、四年の月日を静かにふり返りました。

こうして、長さ約二百メートルの水路が完成しました。その後、三百年をへた今でも、この水路の水はかれることなく沖田の田んぼに、豊かな水を運び続けています。





① 蟠竜湖全景



② 蟠竜湖疎水出口



③ 蟠竜湖疎水入口



④ 蟠竜湖疎水説明板と記念碑



地図拡大



⑤ 嘉左衛門の功績をた  
たえる盆おどり口説



# 11 いわがき養しよくへの挑戦 ちゅうせん

日本で初めて成功させた中上光さん なかがみひかり



にししま 西ノ島町



ブオーン、ジャバジャバ。

カチカチ、カチカチ。

勢いよく海水をくみ上げるポンプの音とともに、貝をなたでたたき音がひびきます。

日本で初めて「いわがき」の養しよくに成功した人が島根県にいます。隠岐西ノ島で貝の養しよく場を経営する中上光さんです。

「小学校高学年のころに学級の人みなで絵をかいたんです。テーマは『将来の島のくらし』だったかな。大人になった自分と島の姿を想像してえがくのですが、自分は船に乗って養しよくをしている

姿をえがきました。当時から、この島の自然の中でくらししていこう  
と  
思  
っ  
て  
い  
た  
ん  
で  
し  
ょう  
ね。」

中上さんの住む隠岐は、本土から四十キロメートルほど北にあります。いちばん大きい島が島後、小さな三つの島が島前、そして辺りにあるたくさんの無人島を合わせて隠岐とよんでいます。その中で、三つの島に囲まれた島前湾は、県内でも有名な魚かい類の養しよく地です。しかし最近、日本のどの漁村とも同じように、魚かい類の減少、後けい者不足、高れい化が問題となっています。

(このままでは、島から漁業がなくなってしまう。)



そう思った中上さんは、同年代の若者が次々と都会へ出て行く中、父親が経営する貝の養しよく場のあとをつぐために地元に残りました。そして、いたや貝やひおうぎ貝だけでなく、「いわがき」の養しよくに挑戦したのです。

いわがきは、日本で最も多く出回っている「まがき」に比べて、肉厚で大きく、味がこくておいしいといわれます。しかし、出回る量が少ないので、まぼろしの貝でした。いわがきの養しよくは、昭和五十年代に東北地方で試みられましたが、うまいかず、海にもぐって採る天然ものに限られていたのです。

「今までやってきた、いたや貝やひおうぎ貝の養しよく技術を使って、何かだれもやろうとしない新しいことに挑戦したいと、ずっと考えていました。」

と、中上さんは笑いながら言います。

なんといっても、しゅんの時期に産地で食べるいわがきは本当においしいものです。養しよくが広まれば、いわがきのおいしい島根県、いわがきのおいしい隠岐として、おとずれる人を楽しませることができ、中上さんはそうも考えていました。

朝早くから夕方まで、海上で養しよくの作業に追われるので、中上さんの一日は、とにかくいそがしいものでした。「いわがき」の研究を始めるのは、養しよくの作業のあとです。研究はいつも夜中まで続

きました。

研究は、まずいわがきのち貝（おさない貝）を育てるところから始まりました。しかし、最初はわからないことばかりでした。

水そうの中で順調に育っていたち貝がとつ然全めつしてしまいう。もうだめかと思うと、しっかり生き残っているち貝が見つかる。なぜ死んでしまうのか、なぜ生き残るのか、そのちがいを細かく調べては、かん境きょうを変えて様子を見ました。

一つの問題を解決かいけつすると、また新たな問題が起こりました。そのくり返しばかりで、いつまでたっても答えが出ません。研究の課題は山積みでした。なやみ、苦しむ日が続きました。

研究が行きづまるたびに中上なかがみさんは、

（失敗の中に答えがあるにちがいない。）

（失敗の中に成功に続く道がある。）

と、自分をはげまし続けました。

「周りの人から、『何もそこまでやらなくても——。』と言われたこともありました。でも、やめることは考えなかったですね。とちゅうで投げ出すのが、いやだったんですよ。何がなんでもやりとげたかったんです。」





中上さんにとって、いわがきへの挑戦は生活の一部でした。  
研究を始めて五年。中上さんは、とうとうち貝を育てて産卵させる方法を見つけました。

「ち貝の育て方のこつがわかったときは、うれしかったですよ。貝が育つのによいだろうと整えたかん境が、逆に貝をだめにすることもあってね。結局のところ、少々悪いかん境の中でも生きていける力が、ち貝には必要だったということでしょうか。よいかん境と悪いかん境のバランスの中で生命は保たれているんですね。」

中上さんの挑戦から生まれた養しよくのいわがきが、今、隠岐の特産物として、全国から注目を集めています。

中上さんには楽しみがあります。いわがきの養しよくに取り組む若い人たちが、隠岐に出てきたのです。これからいっしょに、島のくらしを支えてくれる人が増えることを願っています。

## いわがき 生産から出荷までの流れ



① 6月中旬から9月ごろ、親がきから卵をとる。



② 水そうの中で受精した卵は約6時間でふ化し、0.5~1トンの水そうの中で植物プランクトンを食べて育つ。



③ 0.35ミリの大きさにまで育った幼生を、水そうの中でホタテの貝がらに付着させる。(写真の最小目りの間かくは、10ミクロン。1ミクロンは、1000分の1ミリ。)



④ ホタテの貝がらの上で大きくなったち貝を、おきの養しょく場に移す。



⑤ ち貝の大きさが2センチメートルをこえたら、一度陸に上げて、ち貝がついた貝がらの間かくを大きくする。



⑥ 再び海中につるされたいわがきは、海中の豊かな栄養分を吸収して大きくなる。



⑦ 3~4年後、いわがきを海から引き上げ、出荷作業に入る。



⑧ 市場に送られるいわがき。

# 12

## 馬入れをなくすな

たまわかすみこと  
玉若酢命神社の御霊会風流

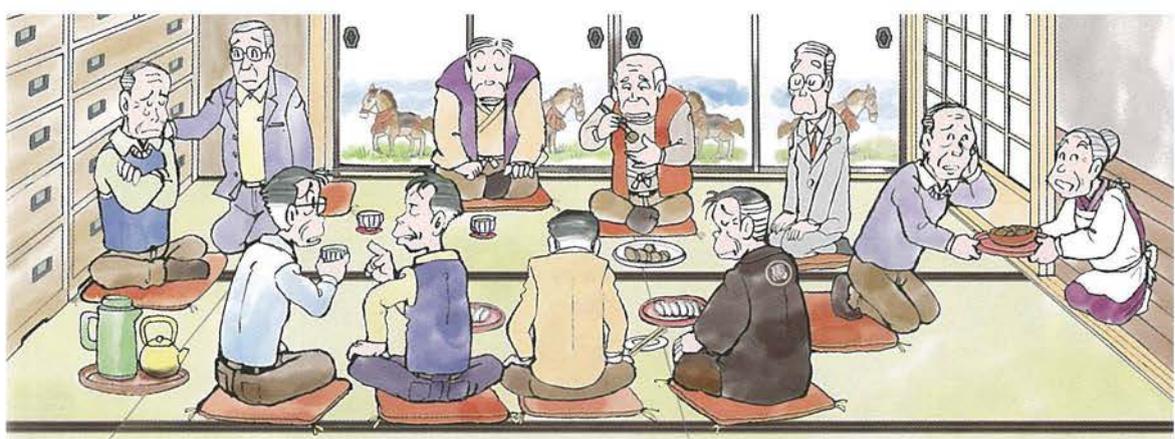


### 玉若酢命神社御霊会風流について

- ◎ 8頭の神馬がせまい参道を社前まで一気にかけぬける、馬入れ神事が有名。
- ◎ 隠岐三大祭りの一つ。隠岐三大祭りにはほかに、水若酢神社祭礼風流、隠岐武良祭風流がある。
- ◎ 昭和40（1965）年、玉若酢命神社御霊風流は、島根県無形民俗文化財に指定された。
- ◎ 玉若酢命神社は、千数百年前からの古い神社で、本殿は平成4（1992）年、国の重要文化財に指定された。

おきしま  
隠岐の島町





「もう祭りはできん。」

「毎年は無理だけん、一年おきにしたらどうだ。」

「今まで長いこと続けてきた伝統をなくしてしまってもいいかや。」

祭りのことを話し合う会議は、重苦しいふん囲気に包まれていました。

たまわかずまに  
玉若酢命神社の「御霊会」は、隠岐島後三大祭りの一つで、隠岐の神々を馬に乗せて集め、安全・豊作をいのるものです。毎年この祭りには、地区の小中学生も参加し、隠岐島内外からたくさんの人が集まりたいへんなにぎわいになります。総代長として祭りをとりしきる吉崎利徳よしざきりどくさんは、この祭りが子どもころから大好きでした。

祭りでは、「馬入れ」という行事が行われます。島後島内の八つの地区から、八頭の神馬が集められ、神馬一頭に対して、「馬付き」とよばれる六人の若者が馬といっしょに走ります。馬は全速力でかき上がるので、馬付きは体力のある若者でないとつとまらないのです。ところが、昭和六十しやうわ（一九八五）年、大きな問題が起こりました。馬付きをつとめる若者が足りないのです。

「伝統をなくすなと言ったって、馬付きをする若いもんがおらんのに。」

馬付きは、祭り当日だけの役わりではありません。六人全員が祭りの一週間前から



馬といっしょに生活し、練習します。だれもができることではないのです。

どうしたらよいか、みんなでちえを集めました。

「では、馬付きを二人減らして四人にしたらどうだろう。」

「おう、それはいい。」

「賛成だ。」

祭りが無事に開かれることが決まり、吉崎さんはほっとおねをなで下ろしました。

それから数年後、再び問題が起りました。

「うちの地区では、もう馬が準備できん。」

今度は人でなく、馬が準備できないと言うのです。

馬を準備する大変さは以前から言われており、その苦労はみんながよく知っていました。昔とちがって、馬を飼っている家が少なくなったため、「御霊会」のために、となりの島から馬を借りてくることもありました。ところが、馬はとてもデリケートな動物です。飼い主とはなれ、船に乗せられて移動するストレスから、練習中に暴れて、馬付きの人にけがをさせることもありました。馬を借りてきてまでこの祭りを続けるには、そろそろ限界を感じていました。

（どうすればよいのか。）

吉崎さんはなやみました。そうするうちに、

「もう、この祭りをするのは無理だわ。」

と言う者まで出てきました。

「気持ちにはわかるが、祭りはもうすぐだ。がんばってくれないか。たのむ。」

吉崎さんよしざきは周りを説得するのが精せいいっぱいでした。

自分たちの地区で馬を準備することができないかと考え続けた吉崎さんでしたが、どうなやんでも、解決かいけつの糸口が見つからず、祭りを続けるのはもう無理だとあきらめかけていたその時です。むすこの博章ひろあきさんが言いました。

「島中の家を全部、歩いてでもたのんでみようや。だめでもともと。やってみようや。」

次の日から、吉崎さんは仲間といっしょに島中を訪ね回って、協力をたのみました。馬入れを残したいという強い思いを伝えながら、なんとか協力してもらえないかとけんめいに話をしました。

「毎年楽しみにしている人がいる御霊会ごれえに、馬入れはなくてはならんもんだけん。」

「将来自分も馬付きになることを夢見る子もおっけん、ここで伝統でんとうをどぎれさせるわけにはいかん。」

「この行事を昔のままの形で残すことが隠岐全体を元気にするは



ずだけん。」

すると、吉崎さんの気持ちにこたえようとする人が、一人また一人と増えていきました。

「そんなに困っちゃったか、せいなら協力すっけん。」

「そりゃ馬入れをなくしたらいけんわ。できることから協力すっけん。わしらも祭りで島を元気にしたいけんのう。」

こうして、協力してくれる人が集まって、平成三（一九九一）年、馬入れを応えんするための、「御霊会風流保存会」ができました。そのおかげで、馬入れを行う八つの地区すべてが「御霊会」のための馬を準備できるようになったのです。

「馬入れが残って本当によかった。」

吉崎さんは、何度も何度もつぶやきました。

平成二十五（二〇一三）年六月五日、島民のみんなが見守る中、馬入れが行われました。保存会は、できた当時に比べて会員が増えました。また、何よりうれしいことに、各地区で「馬付きになりました。」という若者が増えてきました。今では馬付きの人数は、昔と同じ六人にもどっています。



鳥居（左の写真）からの参道はいでんを、拝殿（右の写真の中央にある建物）に向かってかけ上る馬入れ  
馬の行先は地区ごとに決まっています、拝殿右側・中央・左側と三方向に分かれる。



八百杉やおすぎの横の参道  
参道が階段状かいだんじょうになっているため、人と馬が一体こきりとなった呼吸が要求される。



砂けむりすなをあげて進む馬  
参道で見る人びとから歓声かんせいが挙がる。



お旅の行列（左右の写真）  
馬入れの後、これらの行列が行われる。

## 13 幸せコアラ

「おや、こんなことが始まったんだ。」

夕食が終わって新聞を読んでいた父が声を出した。

「この市では、『ネット相談窓口』が開設されることになったそうだ。携帯電話を利用した覚えがないのに多額の請求が届いた。チェーンメールの処理に困っている。ふざけて知らないサイトにアクセスしたらメールがたくさん来た。こうしたことで悩んでいる人は利用してほしいとうったえているよ。本当に困った問題が起きているね。直香も夏希も大丈夫かな。」

「わたしたちは、そんなことしていないから大丈夫よ。ねえ、夏希。」

「うん……。」

中学三年生の姉の直香の声かけに、夏希は一瞬とまどいながらうなずいた。



「さあ、りんごをむいたから、みんなでいただきますよ。」  
母がお皿をテーブルに置いた。

「わたし……後で食べる。宿題がまだ終わっていないから。」

夏希は食卓をはなれて二階の自分の部屋に向かった。

「どうしよう……。」

机の前に座った夏希はつぶやいた。

※ ※ ※

一週間前の夜のことである。夏希の携帯電話にあるメールが届いた。

こんばんは！  
『幸せコアラ』を  
送ります。  
このメールをだれ  
かに送ってください。  
そうしないと、  
あなたの幸せが飛  
んでいってしま  
います。

◎ノ◎  
(・●・)

送ったのは友達みずはの瑞葉であることは送信者の名前なまえでわかった。

最近、六年生の夏希のクラスでも携帯電話を持つ子が増えている。緊急時に連絡がとれるから、習い事が終わったときに帰宅時間を教えられるから、などといった理由で親が持たせる場合がある。

もちろん親にねだって買ってもらった子もいる。

夏希と直香なおかの場合は、共働きの両親が地しんや事故じこなどのときにすぐに家族で連れらぐができるようにするためにあたえられていた。

「学校には持っていないから」、「メールは家族と友達以外にしない」、「友達とのメールは本当に必要な場合だけにする」、「知らないサイトにアクセスしない」、こうした約束を守っていた。

夏希のクラスは、女子の仲がすごくいい。グループに分かれているが対立などはしていない。そのことは担任たんにんの先生も自まんしている。携帯電話を持っていてる女子はそれぞれアドレスを交換こうかんし合っている。

「幸せコアラ」は、記号をたくみに配置してつくったコアラの顔だった。夏希はその顔を見たとき思わず「かわいい。」とさげんでしまった。こんなことができるんだ、だれが最初に作ったんだろう、と感心もした。でも、そこに書かれていた「あなたの幸せが飛んでいってしまいます。」が気になった。だから、その日、ほかの人に送ることはしなかった。

翌朝よくあさ、教室に入った夏希は瑞葉にどうして自分に送ったのかをたずねた。

「わたしのところには真紀まきちゃんから送られてきたのよ。あれすごく





かわいいでしょ。だからすぐに夏希に教えてあげようと思って。」

「だれかに回さないと幸せが飛んでいって書いてあったよ。」

「そうだったかな。ぜんぜん気にしなかったな。」

瑞葉はコアラのかわいさを言うばかりで、自分が送ったことを少しも後悔している様子ではなかった。夏希は「幸せコアラ」をそのままにしようと思った。でも、思い切って消すことはできなかった。

それから二日後の夕方、田舎にいる父方の祖父から夏希の家に電話が入った。祖母が交通事故にあったというのだ。電話をとった夏希はすぐに父の携帯電話にそのことを知らせた。折り返し、幸い命にかかわるけがではなく、しばらく入院することになったが安心するように父は告げてきた。もうすぐおとずれる冬休みに、田舎行って正月を過ごすことを楽しみにしていた夏希にとっては、つらい出来事だった。夏希は祖母が大好きだった。

電話を終えたとき、夏希はとっさにメールのことを思いうかべた。携帯電話を開けてみた。メール受信ボタンをおすと、残されている「幸せコアラ」が出た。そしてそえられている言葉「だれかに送ってください。」の文字が目に入ってきた。その文字の印象は今までとちがった感じがした。見たくはないと思っても、すぐに何度も読んでしまうのだ。

家にはだれもいなかった。母は仕事で帰って来ない。姉もまだ学校からもどっていない。父は安心しなさいと言った。しかし、祖母のけがのことが気になって仕方なかった。それに、このままでは祖母の回復を自分がおくらせてしまうような気もしてきた。

夏希は携帯電話を何度も開けたり閉じたりした。

何分たったかわからない。ひよっとしたら数十分過ぎているたかもしれない。夏希の指は送信ボタンをおしていた。

送り先は幼なじみの恵里。親友だ。夏希と瑞葉、恵里はいつも一緒に行動している。恵里はどちらかといえは目立つ方ではなく、話も三人の中では聞き役に回ることが多い。六年生になってまた同じクラスになった。

（恵里ならわたしの気持ちをわかってくれる。わたしよりしつかりしているし、こんなメールが来ても気にしないかも。）  
夏希は自分にそう言い聞かせた。

あれから数日。毎日、恵里と顔を合わせている。三人で話もしている。しかし、これまでとはどこがちがって、恵里の口数はさらに少なくなったように思う。そして今日、下校途中の別れぎわに、瑞葉に気づかれないように恵里はメモを夏希にわたしてきた。家で開いてみると、そこには



わたしは幸せではないよ。  
悲しかったよ。

恵里

とだけ書かれていた。

※ ※ ※

「ああ、どうしよう。」

夏希はまたつぶやいた。手には恵里のメモがにぎられていた。本だには、今年行った遠足の写真がかざってある。お弁当と一緒に食べた三人がピースをして笑顔で写っている。

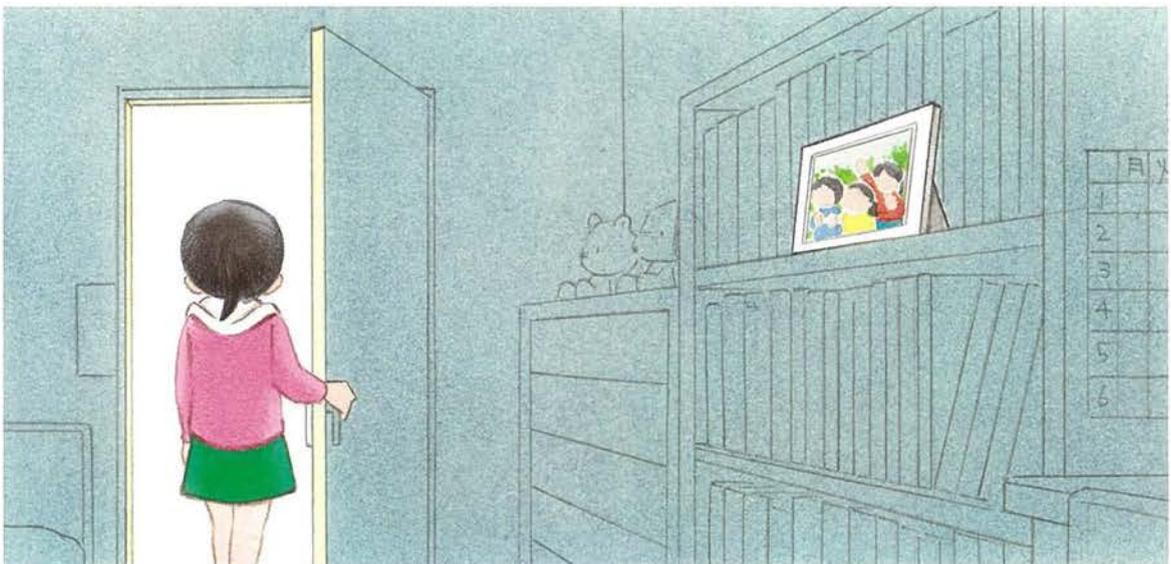
「卒業しても、ずっと仲良しでいようね。」

そんな会話が思い出される。

(なのにわたしは……。)

夏希は、くちびるを固く閉じながらそっと写真から目をはなし、うつむいた。なみだがこぼれた。

やがて、夏希は恵里のメモを手にしたまま静かに部屋を出て、父母のもとに向かった。



# 14 知らない間の出来事

あゆみの回想

(九月一日)

いよいよ、新しい学校での生活が始まった。父の転勤てんきんとはいえ転校は不安だったが、自己じこしようかいのあと、みんなから拍手はくしゅをもらい、これから楽しくやっていけそうな気がした。

ちようど、校門から道路に出ようとするとき、同じクラスのみかさんに声をかけられた。

「ねえ、あゆみさん。わたしたちなんだか仲良しになれそうな気がするの。そのわけはあとでゆっくり話すね。で、早速だけど、これから一緒いっしょに遊ばない。時間と場所はあとでメールするから、携帯けいたい電話のメールアドレス教えて。」





「こちらこそ、よろしく。でも、ごめんね。わたし、携帯電話……、持っていないの。そのかわりうちの家の電話番号、教えるから。」

と、言って、メモ用紙に家の電話番号を書いてわたした。

みかさんは、メモ用紙を受け取ると、がっかりした様子で、

「えっ、携帯持ってないの。ううん、じゃあ、またね。」

と、言って、帰ってしまった。

わたしが前にいた学校では、携帯電話は本当に必要なかったし、親からもまだ早いだろーと言われていたので、持っていなかったのだ。

(九月二日)

新しい学校での二日目。教室に入ると、みんなの視線しせんがなんだか自分に向けられていることに気づいた。思い切ったとなりの席の男子に聞いてみた。

「ねえ、なんでみんなわたしのほうを見ているんだろう。」

「それはね、たぶん、あゆみさんのことが書かれたメールのことだと思うよ。」

「えっ。何て書いてあったの。」

「今度転校してきたあゆみさんは、前の学校で仲間はずれになっていたの、この学校に転校してき

たんだって。ねえ、それ本当なの。」

わたしの心は、おどろきでいっぱいになった。

(どうしてわたしがそうなるってしまうの。この

ままだと本当に仲間はずれになってしまう。)

わたしは、どきどきする胸の鼓動むねを聞きなが

ら、帰りの会で発言した。

「わたしは、前の学校で仲間はずれにされたり

していません。みんなと仲良しでした。根も

葉もないことをメールで勝手に流されたりし

て、とても悲しいです。みんながメールのこ

とを本気にしてしまうといやなので、勇気を

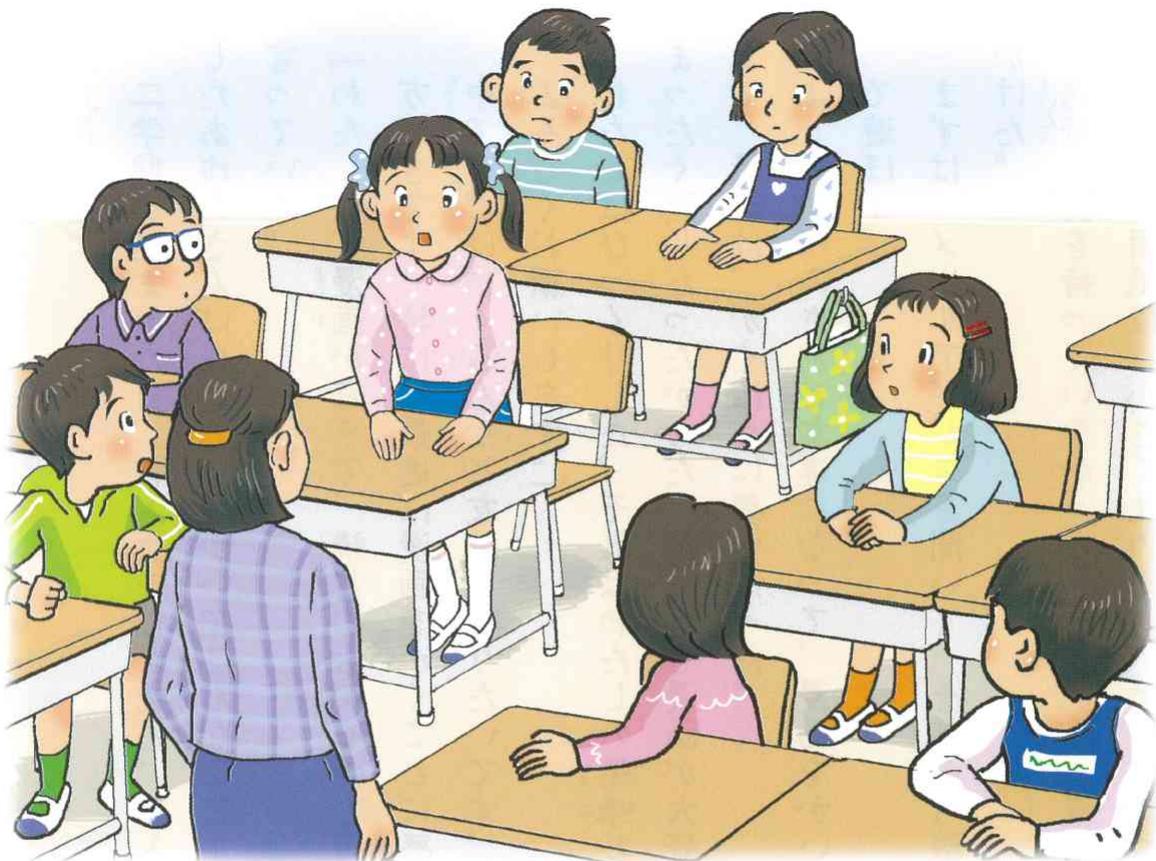
出して言いました。」

帰りのあいさつのあと、先生が声をかけてく

れたが、わき目もふらず家に帰った。

「あゆみに電話よ。」という母の声が聞こえて

きたのは夕方四時ごろだった。





## みかの回想

(九月一日)

二学期が始まった日、転入生をむかえた。転入したあゆみさんは自己しようかいでこんなことを言っていた。

「わたしは、漫画が好きで、読むのもかくのも両方好きです。特に、最近は漫画をかくことに夢中です。はやくみんなと友達になりたいです。よろしく願います。」

わたしはびっくりした。それはわたしの趣味とまったく同じだったからだ。わたしも漫画が大好きで、最近は、かくほうに夢中だった。

(よし、あゆみさんと友達になって、漫画をかって遊ぼう。)

まずは、メールアドレスを聞いて、それから遊ぶ時間と場所を決めようと思い、あゆみさんに声をかけた。

わたしは、ふたたびびっくりした。あゆみさんは、携帯電話を持っていなかった。せっかく、漫画の話ができると思ったのに……。家の電話番号が書かれたメモ用紙は、小さく丸めて、ポケットにつ

っこんだ。

もしかして、あゆみさんが携帯電話けいたいを持っていないということは、友達と連絡れんらくできないということ。ということは、友達があまりいない子だったのではないか、などと思い、

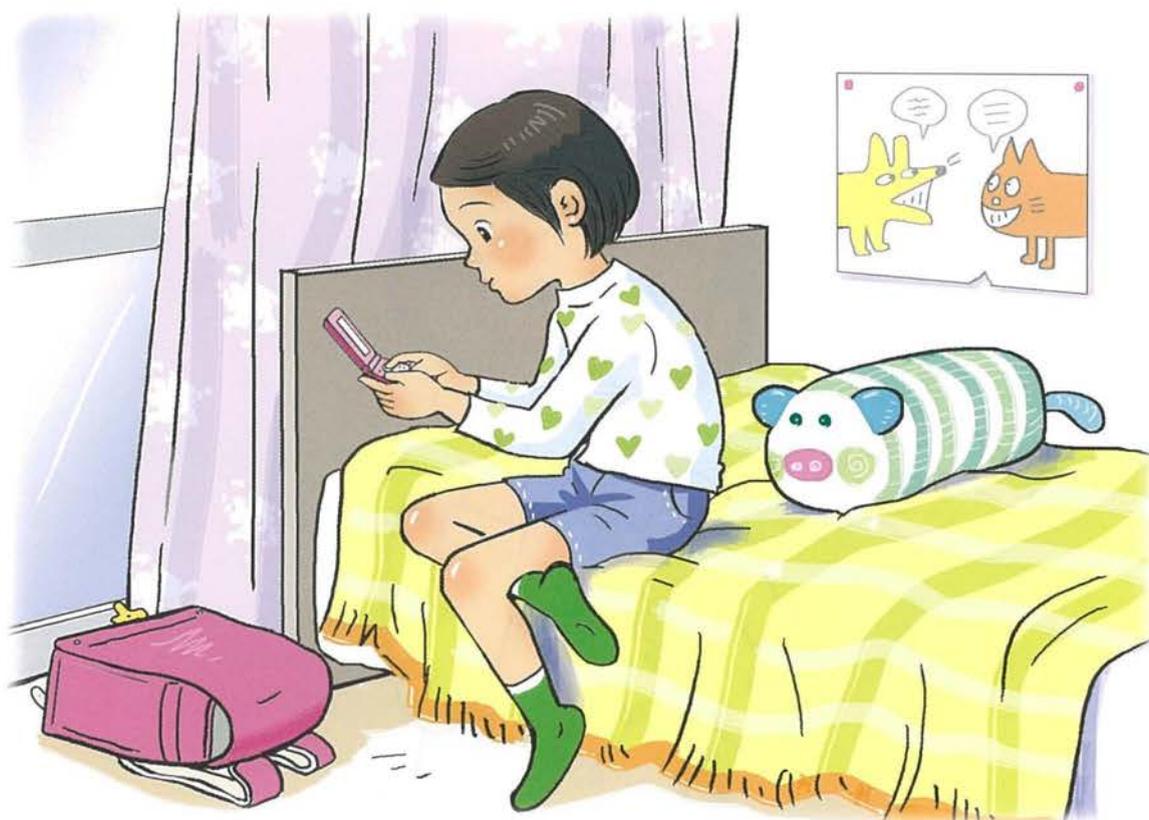
《今度の転校生、携帯持ってないんだって。友達あまりいないみたい、これは推測すいそくだけど。》と、メールに書いてクラスの友達に送った。

(九月二日)

朝、教室に入るとクラスのみんながあゆみさんのことをうわさしている声が耳に入った。

授業じゆぎやうも終わり、帰りの会で、いきなりあゆみさんが手をあげて言い出した。それは、前の学校での根も葉もないことをメールで流されたということだった。なんで、そんなことがメールで流れたのだろう。

放課後、クラスの友達に聞いてみた。



「さっきのあゆみさんの話だけど、どんなことが書いてあったの。」

「わたしのメールには、《今度の転校生は、携帯を持ってないから、仲間はずれにされて、この学校に入ってきたらしい。》と書いてあったよ。」

わたしは、それを聞いて、はっとした。まちがない。それは、わたしが書いたメールがいつの間にかこんなことになっていたのだ。わたしの思いこみがこんなことになってしまふとは……。

頭の中は、あゆみさんのことであっぴいになった。

わたしが、電話番号の書いてあった紙をきれいにもどし、あゆみさんの家に電話をしたのは夕方のことだった。





## しまねの道徳 小学校高学年

	内容	絵／写真
	道徳の時間は……	クリエイティブ・ノア（宮崎匠、黒木ひとみ、吉田健二、もちつきかつみ）
	心をきたえ、自分らしくかがやこう	クリエイティブ・ノア（黒木ひとみ）／日本将棋連盟
1	世界の人びとを守る	クリエイティブ・ノア（もちつきかつみ）／松近真紀
2	采の願いを	クリエイティブ・ノア（吉田健二）
3	ロンドンパラリンピックへのきっぷ	クリエイティブ・ノア（宮崎匠）／三木拓也
4	将棋の道を歩く	日本将棋連盟
5	高瀬川にこめられた想い	クリエイティブ・ノア（吉田健二）
6	大森から世界へ	クリエイティブ・ノア（吉田健二）／中村ブレイス株式会社
7	ひとすじのなみだ	クリエイティブ・ノア（吉田健二）
8	夢、大空に向かって	クリエイティブ・ノア（榎本めぐみ）／澄川喜一
9	城山桜と生きる	大森庸司
10	トンネルにたくした運命	クリエイティブ・ノア（工藤ケン）
11	いわがき養しょくへの挑戦	中上光
12	馬入れをなくすな	クリエイティブ・ノア（もちつきかつみ）
13	幸せコアラ	クリエイティブ・ノア（なぎさ謙二）
14	知らない間の出来事	クリエイティブ・ノア（黒木ひとみ）

## 編集委員

氏名	役職	所属等	備考
永田 繁雄	教 授	東京学芸大学	監修者
毛利 直巳	校 長	松江市立古江小学校	編集委員長
住久 由樹子	教 諭	松江市立法吉小学校	編集委員
新田 紀久	教 頭	出雲市立窪田小学校	編集委員
坂井 務	教 頭	大田市立仁摩小学校	編集委員
岡本 昌浩	校 長	吉賀町立六日市小学校	編集委員
松原 広行	指導主事	西ノ島町教育委員会	編集委員
遠山 茂樹	指導主事	松江教育事務所	編集委員
北川 宏己	指導主事	出雲教育事務所	編集委員
羽柴 千晴	指導主事	浜田教育事務所	編集委員
藤川 正史	指導主事	益田教育事務所	編集委員
塚本 潔	指導主事	隠岐教育事務所	編集委員
三原 久義	指導主事	島根県教育センター	編集委員
安達 利幸	指導主事	島根県教育センター	編集委員
矢野 英明	義務教育課長	義務教育課	事務局
楨川 亨	指導主事	義務教育課 心の教育推進グループ	事務局
片寄 泰史	指導主事	義務教育課 心の教育推進グループ	事務局
野島 博行	指導主事	義務教育課 心の教育推進グループ	事務局
山本 一穂	社教主事	義務教育課 心の教育推進グループ	事務局

### 編集協力者

上田 勢子	教 諭	吉賀町立六日市小学校
水上 真悟	教 諭	吉賀町立六日市小学校
櫻下 鮎美	教 諭	吉賀町立六日市小学校
上山 史子	教 諭	吉賀町立六日市小学校
城市 京子	教 諭	益田市立吉田南小学校
松元 善生	指導主事	益田市教育委員会

## しまねの道徳 小学校高学年

平成26年3月14日発行

発行所 島根県教育庁義務教育課

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

